て、午後にはをり〳〵砲聲も聞えて、何だか大きな戰爭になり相に思はれたから、自分等は一層心を惱ました。この病人をかゝへて戰場に臨んだとて仕方が無い、また串實大戰が始まるなら、軍司令部の位置に行つた處で何うすることも出來ん。いつそこれならば營口に留つて居た方が好かつたものを……など返へらぬことを繰返したが、兎に角大石橋まで行かう、其處に行けば兵站司令部もあるであらうし、今朝發つた大本營の寫眞班も其處に宿つて居る筈と、とある村から路しるべの支那人を雇ひ、提燈に路を照しつゝ進んだ。

大石橋に着いたのはあれは何でも十二時過であつたらうか。此附近、夕立があつたと見えて、路は丸で泥濘のやうになつて居る。それに二十日の明かなる月は太平山の麓を過ぐる頃から煌々と照り渡つて、夜露の深いことと言ふたら、丸で秋のやうである。泥濘の中を辛うして大石橋に着き、兵站司令部に辿つて行くと、部員はもう皆な寢て了つて、仮どころか宿舍さへ無い。仕方が無い、今夜は馬車の中で眠らうと決して、とある洋館の前に馬車三臺を留め、自分は小笠原君、下村君と其階段の上に登り、月の蕊のごとく照る下に、買つて來た麵包を食ひ、麥酒を飲んだ。

柴田君は同じく悪い。

八月二日（火曜日）晴

朝、起ると大目玉を頂戴した。

何うです、昨夜、自分等が遲く到着して、麵麭を食ひ、麥酒を飲んだ其家屋は、運悪く大石橋兵站司令官の寢室に當つて居つたので、朝起ると、司令官（名は逸した）は自身出懸けて來て、貴樣等は何者だ、夜一夜騷ぎ立てゝ少しも眠られなかつたぢやないかと怒鳴つた。これ〳〵しか〳〵の者で、途中から病人が出來て、止むを得ずこの前を拜借したと言ふと、病人も甚もあるものか、すぐ行け—との一大喝。今朝は兵站部に行つて、唆い仮でも貰はうと思つたのに、いきなり其の司令官からかう大目玉を頂戴しては、もう其希望も遂げられないと、餘義なく、仮も食はずに其處を出發した。

柴田君は不相變悪いので、兎に角旰戰病院に行つて診て貰はうと、三町ほど跡戻りをして診斷を受けた。看護長が怪しげなる藥を與れたが、戰地ではさう贅澤を言ふことも出來ず、まア、そろそろ出懸けても好いだらうと言ふのを力に、二歩三歩、馬車を鞭ち始めると、折よく其處を通つたのは、軍司令部の井島軍醫。

聞くと、昨日軍は他山浦まで行く筈であつたが、前方の狀況で、まだ關屯にとゞまつて居るとの話。

實に蘇生したやうな氣が爲た。

關屯は大石橋から一里半、先の日行つた青花峪からは半里位しか無い。行き着いたのは午前十時頃、諸君も恙なく、自分等が營口仕入の土產を出すと、これは實に豪氣だ！と、立ところに麥酒三本、ラムネ五本を平げられたのには驚いた。けれど諸君も自分等が腹を空らして、一日分の食を大方空腹に爲たのにも吃驚したであらう。

第四軍は析木城を占領した相で、明日は海城附近で二箇軍聯合の大戰を演ずるかも知れぬ樣子。愉快々々。

殊に、新聞記者不日到來の噂は始めて此處で聞いたので、『君の博文館からは坪谷善四郎といふ人が來るぜ』と管理部の乃村曹長は語つた。

水哉兄に逢はれるのかと自分は實に嬉しかつた。それに、營口不在中、手紙が五六本來てると言ふので、其夕暮、態々村後の平野に集つて居る輜重軍に就いて、自分の行李の中からそれを取出した。弟の臺灣にあるものから一本、家兄から一本、家妻から一本、いづれも無事。

此日は寒暖計百度以上、實に御話にならん程暑かつた。

八月三日（水曜日）晴

午前六時出發、一里ばかり行くと、東清鐵道の線路で、田家屯、金山嶺などと言ふ所がある。梨本宮守正王殿下は大石橋から軍司令部附として御從軍遊ばされたが、連日の炎暑に中てさせられたと見えて、桃色の紗で包んだ吊臺に御身を横へられて、兵士に擔はれつゝ行くのを見た。竹の園生に生ひ立ち給ひし至重の身にして、かく軍國の爲めに勵精せらるゝのを見ると、實に暗涙の胸に上るのを禁し得ぬので、沿道の兵士皆な一種の感を抱いてこれを見送つたのである。他山浦に着いたのは、午前十一時。前衛がもう敵と衝突しさうなものと思ひながら進んで行つても、更にそのやうな樣子が見えぬ。

鄧家臺の村外れの林の中で、軍司令官は馬を駐めて、頻りに前方の消息を聞かれた。けれど傳騎の齎し來るのは、皆敵の退却を報するものばかり、敵は第四軍から受けた析木城の大打擊に恐れて、意氣地なく海城を捨てゝ去つたやうな模樣であつた。

此夜は鄧家臺に一宿。

八月四日（木曜日）晴

後に、第三師團第十八聯隊の特務曹長横山宗熊君から聞いたが、昨日、敵の海城を捨てゝ北方に退却した光景はそれは奇觀であつたとのこと。丁度十八聯隊が海城に入らうとする時であつた相だ、とある高い山の上に登ると、海城の城壁、城門は手に取るやうに見えて、其の西の平地には、凡そ何萬と數の知れぬ敵兵が、歩兵、砲兵相混して、縱隊を爲して退却して行く。丁度午後三時過ぎの、日影はまともに其上に射し渡つて、双眼鏡で見ると、聯隊長、大隊長が馬に乘つて號令して行くのも明かに指點せらるゝ。『砲があると、打つて呉れるのたがナアと私等は見て居つたつてすが、屹度この大兵は析木城方面から、野津軍に追はれて、第二軍の出ぬ前にと慌てゝ逃げ去つたに相違ないです。』

實際、大石橋から析木城、海城と前進して行く時は、わが作戰着々として成効し、野津軍の敵の左翼を壓迫した具合などは、素人眼から見ても、實に小氣味が好かつた。敵は初めからこの大孤山上陸軍を非常に大きく見て居た相で、それの出られるのを、實に頭痛に病んで居た。大石橋を戰爭半途で退却したのも、海城の堅固なる防備を捨てゝ去つたのも、全くこれが爲めである。

て、軍司令官は此朝の午前四時に鄧家臺を出發して、八時には軍馬肅々として、既に

海城の城壁

へと臨まれて居た。前進隊は大石橋戰爭當時の位置のまゝ、既に海城以北に突進し、第四師團の一部は急行進を起して、牛莊城の方向へと進んだので、其勢の盛なる、實に破竹も啻ならぬ光景であつた。で、軍司令官は約二時間ほど、海城々壁を隔てた沙河の河岸に形勢を見て居られたが、やがて其河岸を五町ほど東南に下つた箭樓子と言ふ村落に宿營をすることに決して、午前十一時頃、其方面に向つた。敵は海城では無論一戰爭する積であつたらしく、唐王山、亮甲山を始めとして、羅家堡子、張家元子あたりの村には一面に掩堡を築き、鐵條網を張つたまゝ捨てられてある。自分等はこの防備を見て、『何うも實に敵の氣が知れん、これ程力を盡して防備を施して置きながら、一支へもせずして退却とは、一體何うしたんだ。味方の兵などならば、これ程力を盡したからには、隊長が退却すると言つても承知しまいがナア』などと語りながら、箭樓子といふ村落へと入つた。

此村は狹いので、自分等は其の隣村の張家元子に宿營することゝなつた。

八月十日（水曜日）晴

此地に來てから今日でもう七日目、此間、大石橋の糊戰記を六十枚ほど書いたことと、中、下村兩君が營口に出て歸朝の途に就かれたことゝ、それより他には別に書く程のことも無い。我軍は烟臺、蛇龍寨、耿家庄子の線に據つて、主力を鞍山站、騰鰲堡附近に置ける敵軍と相對し、日々多少の衝突を見るばかり、兩軍とも孜々として次て來るべき戰鬪の準備に忙しい。

海城は日清の役に、わが大軍の冬營したところ、住民皆我兵を記憶し、日本語をうろ覺えに覺えて居るものも多く、「玄海灘月清し」の唱歌などを唱へて居るものも尠くは無かつた。自分等の宿營の子供達などは、殊によく日本語に通じて居つて、いろ〳〵麥酒や、鷄卵や、砂糖などを買つて來て與れた。忘れられぬのは、此家の主婦。他の支那婦人の大方避難し去つたにも拘らず、この家の主婦のみは頑として家に留り、前の畠の茄子、さゝげなどを兵士の徵發しに來るのを、終日鍬を携へて見張つて居るといふ權幕。毎日、幾回となく凄しい聲を立てゝ、わが兵士と衝突するばかりではなく、をりをりは夫婦喧嘩をも始めて、それは頗る異彩に富んで居た。

自分は蓋平古家子の寓に來る迄は、至極元氣で、戰場には何時も最先に飛び出すといふ方であつ

たが、其處で腹を害してから、何うも身體がだるくッて、折々は熱なども出て、よく軍醫部の井島小島の兩軍醫の世話になつた。大石橋の戰爭中は、幸にそれが全治して、此の具合ではもう大丈夫と思つたが、營口に行つて、暑熱に中てられてからは、どうも絶えず心熱があるやうな氣が爲て、腹の具合も甚しく好くなかつた。けれども遼陽までは十五里、鞍山站に敵は居るやうなもの、、前進運動を起しさへすれば、もう只一押である。遼陽からは自分等は歸國の途に就く筈、何うかそれまではどつと寢るやうなことが無ければ好いがと絶えず心中に念じて居た。此村に來てからも、何うも身體が本當ではないので、よく軍醫部に行つて診察を乞うた。

二三日前、營口で買つた來たハインツ、タアフオテの『死骸マリー』といふ短篇集とアナトオル、フランスの『蜂姫』といふのを鷗外先生に御目に懸けた。先生の評では、短篇集中の『鬼沼』と言ふのが一番面白がつた相で、此作者のモオハッサンに私淑して居る點は餘り敬服が出來ぬと言はれた。『蜂姫』は鳥渡した御伽噺で、文章が炉爛であるばかり、他に取るべき所が無い。

八月十一日（木曜日）晴

午後十一時半頃でもあつたか、例の暑いので、半ば裸體になつて涼んで居ると、家の前の高粱畑

の陰から、先見えたのは、管理部の乃村曹長。

『君、好い人を伴れて來たぜ！』

と叫んだと思ふと、其後から、代赭色の制服を着て、後に日蔽の布の下つた帽子を冠つた、背の低い人の姿――それがわが社の坪谷水哉兄であつたのを認めた時には、思はず自分は飛上つて喜んだ。

坪谷君はいたく憔悴した風で、『僕はもう漸と遣つて來た。昨日、大石橋で既のこと病院に入院しやうとした』といふ。聞くと、北兎房店で、この連日の炎暑に犯されて、それからは同行の新聞記者、殊に松林伯鶴氏、岡田雄一郎氏に助けられて、飯も碌々食はずに遣つて來たとの話。まア、緩り爲給へ、此處まで來れば、もう大丈夫だと自分は柴田君、堀君、亘君などゝいろ〳〵世話を爲て、をりから畑から採つたさゝげ、茄子等の煮たのを御馳走すると、實に、これは旨い、今迄兵站部の福神漬、牛罐に比べると、大牢の珍味も啻ならぬと舌鼓を鳴して食はれた。處へ、新愛知の新田靜灣君が來られた。君にも、自分は久し振で、こんな處で逢はうとは思ひも懸けなかつた。て、東京の話やら、何から彼やらしたが、まア、兎に角身體が第一と自分が水哉兄を案内して軍醫部に診察を請ひ、午後から共に參謀部に行つて、その配屬の定るのを待つた。

箭樓子の楊樹の蔭、新聞記者諸君が驢車數臺に軍用行李やら柳行李やらを積んで、腕に各新聞雜誌社の名を記した白布を卷いて、一團を爲して集つて居られたさまはすぐ思ひ出される。軍司令官の宿舍の前、やがて副官が出て來て、從軍者心得を一人々々に渡し畢り、さて一々姓名を呼び上げて、その配屬を定められたが、水哉兄は幸ひに軍司令部附となり、これから僚に一室に起臥する身となつたその嬉しさ！

此日は猶一つ記すべき事がある。それはその日の午後、軍管理部長 橘 少佐が第三師團の第三十四聯隊第一大隊に更任される 廻狀 が廻つて來たことで、自分等はこれを見て、何んなに遺憾に思つたか知れぬ。少佐には上陸以來非常に世話になつて、殆どわが寫眞班は少佐のお蔭で餓えも凍えもせずに此處まで來ることが出來たと言つても好いのである。て、自分等は早速少佐を管理部に訪問した。

其夜の

送別會

これも從軍中忘られぬ紀念と爲つた。管理部の中庭、空には星が降るやうなのに、卓の上には蠟燭

の火が明く點つて、周圍には少佐を始め、管理部の部員、下士、書記、傭人等が居並んで、一盞あるものは皆それを演じて少佐を送るといふ光景。自轉車屋の長唄、馬卒の淨瑠璃、最後に森林黒猿氏の講談、自分はそれを聞きながら、深く物を思つたので。

午後に面會した時、

『それでは隨分御健全で』

と自分が言つて別を告げると、

『いや、鞍山站で第一に戰死するものがあつたら、僕だと思ひ給へ』

と言はれた。

其言葉、その悲壯なる言葉が、長唄、淨瑠璃、講談を聞いて居つても、絶えず自分の胸に思ひ出されるので、そのやうなことは無い、無論無いと確信して居りながら、もしや野戰隊に出て、この儘戰死さるゝやうなことはありはせぬか、少佐の勇しい戰死を聞いて袖を濡らすやうなことはありはせぬかと、絶えず胸が躍るのであつた。仰ぐと、空には運命の星が閃々と。

歸途、高粱畑の夜風に戰ぐ間を、西川通譯官と辿つて來ると、

『橘さんも、あれてほつくり戰死するやうなことはありはせんか』

と西川君が突然言つた。

『左樣サ、僕も左樣思つてるんだが』

二人は默して歩いた。

人の世には、ある時、ある場合、明かに運命の急奔するのを感ずることがある。人の智慧の最も鋭く明かになつた時、人の感情の最も純なる境に達した時——あゝその夜の光景は確かに自分等をしてある不可思議に觸れしめたのである。

嘘……。

八月二十日（土曜日）曇

坪谷君の到着した翌日、自分は海城の市街を見物に出懸けたが、何うも身體の具合が思はしく無いので、諸君が支那料理を食ひに行かうと言ふのを斷つて、歸つて來て、横に倒れたが、さア、其時から自分の熱病は始まつたので、十四日には、まだ無理をして、觀戰記を十二三枚ほど書いたが、十五日からは烈しい熱。三十九度内外を上下して、猶それより烈しくならうとする勢を示したので、自分は幾度となく軍醫部に行つては診察を請うた。それに十五日からは雨、雨、雨、附近の低地は

皆な川になつて、司令部のある隣村にも行けぬといふ有様なので、其雨を衝いて、自分は幾度厠に赴いたであらうか。十七日には、もうとても軍醫部には行けぬので、井島軍醫に來て診て貰うと、熱が三十九度七分、何うもまだ分明と解らんが、ことによると、腸窒扶斯になるかも知れぬとのこと。

軍中で腸窒扶斯！自分は死を覺悟しなければならぬ場合に達したのである。内地ならば腸窒扶斯は左程難治の病ではなく、ある一定の時期を經過しさへすれば、當然快癒するのであるけれど、牛乳といふ必要物の無い軍中では、とても全快は覺束ない。自分は宿舍の長持の上に横つて、實にさま〳〵のことを思つた。

此時、自分に限りなき恩惠を賜つたのは、鷗外先生である。先生は自分の病狀を聞いて、いろ〳〵懇切に世話をして下されたばかりではなく、離れて居ては、病狀がよく解らぬから、軍醫部に來て寢て居れと言つて下された。忙しい軍醫部に、いかに重い病人と言へ、餘り我儘と、控へて居ると、いや決して構はんから來て居たら好からうと度々言つて下されるので、自分も遂に其好意に甘へて、十八日の午後から、軍醫部の一室に行つて寢て居ることとなつた。熱は不相變盛で、三十九度五分を如何にしても下らぬ。それに、十九日からは連日の霖雨が晴れて、軍が活動しやうといふ噂が頻々として聞えるので、自分は寧ろ兵站病院に入院し度いといふことを申し出た。

遼陽、遼陽、これはわが金州に居る頃から夢みつゝあつたところである。それが、今になつて、此始末で、其大戰を見ることか出來ぬとは！

實に無念。

けれど何うする事も出來ん。

鷗外先生は、何うかして病院に行かず、全快するやうにと頻りに心を痛めて下すつた。けれど、何うも熱が下らぬので、今日午前九時に擔架に乘つて、海城の兵站病院へと行つた。

一行の中、亘君は殊に親切に世話を爲て呉れて、此日も擔架について、兵站病院まで行つて呉れた。空は半晴半曇で、搖られながら白布の間から見ると、もう秋になつた碧落が聰しげに彼方此方から覗つて、淋しい風が路傍の柳の葉を渡つて居る。自分は仰向けになつた儘、さま〳〵なる思に胸を惱したので。

腸窒扶斯——死——父の日記——自分の日記——寡婦——孤兒——

海城の兵站病院は、東清鐵道の鐵橋を渡つて、二三町行つた處にある。本部に行つて、少し待つと、やがて看護長が出て來て、自分は其儘病室へと導かれるのであつた。一町ほど後に戻つた處に、

敵の棄て去つた洋館、其前に自分の擔架は下されたが、目を擧ると、

海城兵站病院傳染室

の數字。傳染室！自分は自分の身の地下に陷るがごとき烈しき戦慄を總身に感じたので、此處に入れられるからには、もう自分は何うしても腦窒扶斯、此處で死ぬ〳〵ければならぬとの考が矢のごとく衝いて來た。

けれど仕方が無い。

室内に入ると、淺黄の蚊帳が釣つてあつて、赤い毛布にくるまつた患者が二人寢て居る。先つ嬉しく感したのは、看護卒が赤十字の徽號の附いた白衣を汚れた洋服と着替へさせて呉れたことで、蚊帳の中に入ると、蕗蒲團に二枚の毛布。病院だけに、その設備の完全して居ることは、戰地とは思はれぬ程で、熱ある頭を枕に着けながら、此處でならば死んでも遺憾が無いと思つた。

看護卒が土瓶を持つて來る、湯を持つて來る、鷄卵を持つて來る、ミルクを解いたのを持つて來る、何でも用事のあつた時には、呼んで呉れとの親切。ことに、すゝ診察して呉れた神戸一等軍醫（精次郎）の懇情は、自分が終生忘るゝことが出來ぬもので、氏は丁寧に診察して呉れて後、『ナア

に、今の處では大したことは無い、腦窒扶刺などには無論爲ることは無い。第一、チブスの舌とは舌が違ふ。私は臺灣に居た頃、自分でチブスは遣つたが、こんな者ぢや無い』と力をつけて呉れた。實に嬉しかつた。

同じ蚊帳の中に臥て居たのは、一人は第十八聯隊の特務曹長横山宗熊氏、一人は滿州軍總豫備隊第十二聯隊の歩兵少尉田中德太郎氏、横山氏は赤痢を病み、田中氏は自分と同じく熱を病んで居られたのである。其室の隣は事務室、其處には看護長一名、看護卒二名、赤十字の看護人一名これ丈て此の傳染室將校病室を受持つて居るのであるが、患者は猶其次ぎの大きな室に七八名詰つて居て、何れも熱やら、赤痢やらに呻吟して居るのであつた。それにしても自分は幸にして將校病室に收容されたので、淺黄の蚊帳に蠅の煩いのを防ぐことも出來たし、和かい蕗蒲團に體の痩せて痛い思も爲ずに濟んだが、下士兵卒の病室と言つたら、それは酷いもので、八疊の狹い間に、この蒸暑い日を、五六人も折重つて寢て居るばかりではなく、多い蠅は無遠慮に遣つて來て、その煩さゝは譬へ難い。ことに、傳染室の重病室——看護卒が話すのには『實に、チブスの重いのには閉口して了ふ。三人ほど重いのが有るのですが、昨夜などは一人は夢中で飛び出して、海城の北門の近所まで半分裸體で行くぢやありませんか。それに、チブス患者は馬鹿に力があつて、本當に仕末につきは

爲ません。昨日も二人死んで、今日今少し經つと燒く筈です」

戰地の病者、實にこれ程慘憺なあはれむべき者は無いのである。

患者に供されたる食料は、粥、鷄卵、ミルク等で、それを看護卒は病室の入口に、分捕の露國製の瓦爐を据ゑて、終日長くその世話を爲て居るのであるが、自分は熱があるので、ミルクと、湯粥と、鷄卵と、其他は供されなかつた。梅干を一粒呉れ給へと言つても、無い。食鹽を少し貰つて呉れ給へと言つても、無い。幸ひ、横山特務曹長は隊から携へて來たのだと言つて、梅干を牛鑵の中に交ぜて入れて持つて居られたので、自分は度々其恩惠に預つた。

それから、自分の居た室、それを少し詳しく書いて見やう。露國の監視兵の家屋らしいので、其構造も至極粗雜に、窓は只一つ西に向いて明けられてあるばかり、日影の他へそれた時には、實に暗澹として穴藏の裡かと疑はれる。それに、硝子が破れて、其處に白い紗の布を張つたので、時には明けて戸外を見たいと思ふことがあつても——夜のカンテラの油烟が心地悪しう一室に籠つた時でも、それを開けて、新鮮なる空氣を入れることが出來ぬ。そして其窓の處には、蠅が數限りなく群集して、少しでも蚊帳を動かすと、ワンと飛び立つ。ことに、赤痢患者は厠が近く、半日に二十五六度も通うので、其度に捲上ぐる蚊帳には、何時となく蠅が入つて、毎日二度位拂なければ何

うしても煩さくつて堪らぬのである。

自分も腸を害して居るので、よく其の厠には通つたものだ。室の扉を排して、入口の石段、其處には看護手が湯を沸し、粥を煮る爐を据ゑて居るのであるが、それを熱ある身のふら〳〵と足元危く、家屋に就いて左に曲ると、ブリキの屋根の、周圍をアンペラで圍んだ急製の厠があつて、石灰の白いのが地も見えぬばかりに撒布されてある。其厠のすぐ前が鐵道線路で、朝に夕に無數の清苦力が開路々々と言ふ聲の下に、糧食彈藥を滿載した貨車を推して行くのが明かに見える。向ふを見ると、洋館の幾箇となく立つて居る彼方に、海城兵站司令部の國旗が勇しく風に飜つて居る。自分は此日から八月三十一日まで、十一日間、この一室に呻吟して居つたが、時には雨降り、風吹き、雷鳴の夜などもあつて、厠のブリキ屋根が飛び、周圍のアンペラが離れたりして、隨分困つたことがあつた。忘られぬのは月の夜、晴れたる滿州の空には遠山の影も明かに、地に落ちたる家屋の影黑く、そゞろ寒き衣の袖を合せつゝ見ると、彼方此方に點々として明けき燈火の光。

兵士の隊を爲して進んで行くのもあつた。

それから第四師團の砲兵第四聯隊の某特務曹長にも此處で懇意になつたが、氏は餘程快癒に近いので、色々なことを語つては、よく我々を慰めて呉れた。中でも大石橋の戰、これは最も特色あ

る物語であつた。

氏が語らるゝには、『實に、大石橋の砲戰は烈しかつた。先づ、我等の砲隊、それに砲兵旅團の一箇聯隊、確か第十四だと思つたが、それが合して、とある丘陵の上に陣地を布いて、敵と相對した。實に、敵の砲彈がよく來る。丸で砲烟で味方の陣地が埋められて了ふ位であつた。それに、敵は陣地を山の背に置いたので、味方の砲は打つても打つても何の効が無い。午後からは味方は砲の打方を止めて丸で敵の砲彈の下にひそんで居るといふ始末さ。歩兵などには隨分えらい眼に逢はされたのがある。現に、一人の歩兵があまりに砲彈が來るので、傍の石塔みたやうなものを楯に取つて、小さくなつて屈んで居つた相だ。けれどそれが終日なので、終には疲れて、右の足をぐつと伸した。すると、其處に砲彈が遣つて來て、忽ち打ち貫れて了つた。又、現に、僕が見て居つたのだが、味方の陣地の肩牆の處に一つ敵彈が炸裂して、其肩牆の土砂が後に居る一砲兵を頭から埋めて了つた。先生、遣られたなと思つて見て居ると、やがて其土砂の中から、ヤア、これァ酷いと言つて、顏を拂ひながら起上つた。これなどは實に話のやうさね。で、終日かういふ風に、敵彈を浴びつゝけて日が暮れる、まァ好いと思ふと、退却といふ命令が來た。で、敵に知られると大變だから、こつそりと準備をして、一里ほど後の、あれは何とか言ふ小さい村に退却した。まァ、これで、

今夜は此處に宿營するのであらう。終日、飯も碌々食はんから、米でも炊いて食はうと思つて居ると、また、『元へ！』との命令が來た。仕方が無いので、重い砲車を引摺つて、元の丘陵の上に行くと、もう夜の一時過。明日また一日今日のやうに打付けられるかと思つて、うんざりして居ると、敵は退却！といふ報告が來た。實にあの時は嬉しかつた」

其苦戰のさまが想像される。

此日、午後、坪谷君が見舞に來て呉れた。次手に屆けて呉れた手簡二通。一つは島崎藤村君、一つは蒲原有明君、島崎君のには、君がかの露艦出沒の際、津輕海峽を渡つて函館に赴かれたことが書いてあつたし、有明君のには、東京の雷鳴、市中の忽慌せるさまなどが詳しく書いてあつた。熱ある病床に、幾度繰返して讀んだであらうか。

八月二十五日（木曜日）晴

熱はまだ依然として除れぬが、大抵三十八度五六分の處を往來して、病名も流行性腸胃熱と言ふことに昨日始めて一定したので、自分は少なからず愁眉を開いた。けれど今朝からは遼陽攻撃出發の噂が非常に高くなつて、明日は何うしても出懸るらしい。あゝ、自分は愈々遼陽の戰爭に取殘

されるのである、と思ふと、無念で無念で實に堪らぬ。病氣が稍好いので、其反比例に其の念が益〳〵高まるので、南山以來自分は何んなに遼陽々々と胸に畫いて、樂んで居つたかと思ふと、居ても立つても居られぬやうな氣が爲る。

午後、柴田君、坪谷君、松林伯鶴君、亘君、小笠原君、新田韡濤君などが遣つて來て、愈々明日出發の命令を受取つたから、と暇を告げた。

『まア、好いサ、君は南山から幾度も戰爭は見たのだから』

『まア、氣を遣はずに、ゆつくり療養し給へ』

『僕等がよく見て話して上るよ』

『本當にゆつくり療養し給へ』

と諸君は口々に言つて去つた。

絶望！絶望！

夜になると、附近に宿營して居た兵士が皆な前進運動を起して居るのが明かに聞えて、幾隊幾隊と續いて行く靴の音、その絶間には腰のアルミニュームの金椀のかた〳〵と鳴る音、それが終夜、熟にうかされたるわが耳に觸つた。

絶望！絶望！

あゝ、わが大軍は進むのである。

八月二十六日（金曜日）晴

曉に見ると、四近既にわが兵の影をも留めず、秋高く晴れ渡つた空には、白雲消ゆるかとばかり漂つて、停車場に添つた兵站司令部の洋館の上の日章旗、それが獨り淋しさらに朝風に翻つて居るのが見られる。夫にしても、我軍は如何にしたてあらうか。今度は敵も大兵を掌裏に收めて、其防備も中々一通ではないと聞いて居る。であるから、今回こそは勇武絶倫なるわが軍も、流石に少しは手剛い抵抗に逢ふとであらう。否、或は絶大なる未曾有の戰爭が其一帶の平野に展けられるかも知れぬのである。かう思ふと、座ろに胸が躍いて、唯々彼方の空ばかり望まるゝのであつた。

時に、砲聲二三、遠く……遠く……。

愈々鞍山站の戰端は開かれたのか知らんと思つたが、それは左樣でなくつて、其後は砲聲絶え、

甘泉堡、鞍山站、首山堡

静かなる空には一片の雲もなくなつて了つた。

午後、看護卒が來て語るには、『甘泉堡には大した戰爭は無かつた相です。今少し前、砲聲が少し爲たが、もう鞍山站を遣り壓けて居るかも知れません。今も向ふの山に、澤山將校らしい人が登つて居たから、何かと思つたら、マンシウ軍總司令部が觀戰の爲めに上つたのださうです』

『マンシウ軍も出發したのか』

『えゝ、今朝……』

『到頭、置いて行かれて了つた。殘念だナア――』から叫んだのは田中少尉である。

『南山以來、得利寺でも、大石橋でも、豫備隊だの、後方隊だのに殘れて、充分に敵兵の顏を見んかつたから、今回こそ一つ！と思つて居たのに、武運が拙くつて、この始末、實に惜無い』

これは横山特務曹長。

軍繃に身を置く人々のこの懊惱を聞くにつけても、愈々この大戰に取殘されたのが口惜しく、自分ながら、重ね〳〵この熱病を呪咀うのであつた。

八月二十九日（月曜日）晴

昨日も一昨日も今日も砲聲聞えず。

衝突るならば、もう衝突りさうなもの、何うしたのか知らんと、自分等はいろ〳〵に軍の行衛を想像したが、更に其の飛信の一片をも得なかつた。熱が出ると、キニイネを服むので、後は頭痛がして、何うも氣分が惡くつて仕方が無いのであるが、熱の方は日增に低くなつて、體溫表の線が三十七度五六分のところを往來して居る。午後、神戸一等軍醫が診察に來て語るには、『鞍山站は存外抵抗なくて占領し、今は第一軍、第四軍と三方から遼陽を包圍しやうとしつゝある相だ。ことに、敵は既に退却の準備をして居るから、大した戰爭にもなるまい』と。

八月三十日（火曜日）曇、雨

未明より絶えざる砲聲。

其郷は丁度遠雷の地平線上に轟くやうて、或は高く、或は低く、靜かな朝の空氣に振動して聞えたが、厠に行つた歸途に、ふと見ると、其處には面白い一場の景。前なる兵站司令部では今朝鞍山站まで馬糧彈藥を滿載した貨車を出すさうて、傍なる廣場には、清苦力幾百人となく密集し、牛車、騾車、輜重車の縱横に亂れ合つた上には、靜かに靜かに晴れ渡つた空、旆のやうに斜に靡いた白い

雲、それから右に少し偏つて、深碧なる空に鼠色した山脈が長く靡いて居るのであるが――其山の左に當つて、砲聲は崩るゝやうに聞えるので。

此日終日砲聲が止まなかつた。

九月一日（木曜日）晴

昨日も終日砲聲

今日も砲聲、砲聲。

『實に盛ですね』

『殆ど毎日ですナ』

『それにしても一體何うしたんでせう。まだ取れんのですか知らん』

『何うも左樣らしいですナ』

『それでも退くやうなことはありますまい』

『それア、日本兵ですから、そんなことはありますまい。けれど、敵も中々頑强に遣ると見えますナ』と、田中少尉は、二三日前から熱が取れて、大分元氣が好いので。『實に殘念だ、あの砲聲を聞いて、かうして臥て居られるものだか何うだか、沿考へて見給へ、實に千秋の遺憾だ』

『御同感ですナ』

と自分も言葉を合はせた。

自分は三十日に、熱が漸く分離し、卅一日の夜には全く平熱平脈に復したので、今日午前に、平病室に移されたのである。自分は如何に喜んだであらうか。いかに本多軍醫正、神戸一等軍醫に其恩を感謝したであらうか。

九月三日（土曜日）晴

昨日も今日も盛なる砲聲。

自分は漸く熱が取れたばかり、十七日間も湯粥を啜つて居たので、殆ど數歩をも滿足には歩けぬのであるけれど、この連日の砲聲、氣に懸る凄しい音を聞いては、何うもじつとしては居られぬので、これを田中少尉に謀ると、君が行く氣なら、僕も後れはせんとのこと。兎に角病院長に聞かうと、其旨申出ると、田中氏はもう好いが、田山氏はまだ少し無理だといふ。けれどそれを達つて賴んで、どうせ貨車に便乘するのだからとか何とか言つて、漸くに貰つた退院券。それを兵站司令官

白井少佐の處に持つて行つて、明日鞍山站までの貨車の便乘を請うと、司令官の言はるゝには、田中少尉は將校だから異議が無いが、今一人の方(即ち自分)は海城北門内の兵站監部支部に行つて、岡野參謀に許可を得て來なければ、自分獨斷で便乘を許可することが出來ぬといふ。で、自分は田中少尉に伴はれて、海城北門内まで出懸けて行つたが、この五町ばかりの間の路、それがいかに辛く大儀であつたであらうか。路傍に佇立んでもう動けぬと言つたことは幾度だか知れぬ。幸に、岡野參謀は情狀を酌んで快く諾して許可して呉れたけれど、病院に歸つた時には、呼吸が切れて、とても明日の退院は覺束ないと思つたのであつた。

けれど、砲聲、砲聲。

斷じて明日退院と決した。

九月四日（日曜日）晴

田中少尉は後備旅團十二聯隊の小隊長で、日清の戰役に出征した後備の古武者であるが、年は大凡三十七八、元氣はまだ頗る旺盛で、病氣の爲め、今回の大戰に從ふことが出來なかつたことを悔むこと一方ではなく、戰後おめ〳〵と歸隊せば、何の面目あつて長官に見えんとの語氣が絶えず

其言語に顯はるゝのであつた。

海城から貨車に便乘したのは午前九時。けれどこの綱曳の汽車の遲いのにはいかに心を焦立しめたであらうか。一貨車の兩側に二十五名の清苦力、その貨車が四十二三ほど連つて、開路々々の聲の下に、一歩々々鞍山站へと向つて進むのではあるけれど、丁度この附近の勾配がやゝ上り阪になつて居るので、その晩いことゝ言つたら、二時間經つても、猶海城の城門が明かに後に指さゝれるのであつた。そればかりでは無い、今朝は前面の砲聲全く止んで、聞くと、昨日を以て首尾よく遼陽を占領したとのこと。不運極るのはわれ等。

東煙臺

に着くと、もう午後三時。

此處ですれ違ふ貨車は、遼陽の負傷者を滿載して來る筈と聞いたが、着くと、其貨車は既に早く到着して居つて、慘憺たる光景は實に人をして戰慄せしむるばかりであつた。田中少尉は戰況を聞きにと出懸けて行つたが、少時くして歸つて來て語るのには、遼陽――ことに首山の戰は實に激烈で、到底今までに類が無い相だ。一番激戰したのは第三師團と第六師團で、第三師團の第三十四

聯隊などは辛うじて聯隊旗を携へて歸つた位であるさうな。今、運んで來た負傷兵は、皆第六師團の下士と兵士とで、三十一日午後の首山の戰爭の激烈なこと、言つたら、全く敵の主力を正面に受けたことゝて、其損傷夥しく、ことに敵は鐵條網の後に機關砲を据ゑて、味方の進むのを近くに引寄せて、覘ひ打ちに遣つたものだから、味方は幾度となく退却の非運に遭遇し、一時は占領はとても覺束ないと思つた程であるとのこと。

少尉は語り終つて、

『實に遺憾極まる！』と叫んだ。

其顏は甚しく曇つた。

やがて語を續いで、『それによくは解らんですけれど、實に遺憾なことは、私の聯隊が非常に遺つた相です。第三の卅四が酷く遺られたので、第六と第三との間に間隙が出來た。そしてそれを埋める爲めに、マンシウ軍の總豫備隊なる私の聯隊が其間に繰出されて、首山の東南方高地を其隊のみを以て占領せよとの命令に接して、それア、酷く遺つた相です。實際、私などは面が出せんですナ』

と少し考へて、

『これといふのも、聯隊の屁鉾將者の御蔭だ。何んの、少し熱の出た位を鵬窒扶斯だとか、何んとか大業に言ひ立てゝ、病院に來て見れや、何んの大したことも無いものを ……。實に屁鉾醫者の爲めに誤られて了つて、合はせる顏はありやせん。それに、よくは解らんけれど、大分、戰死者が多い相ですから』

此時、停つて居る貨車の前を一人の上等兵が過ぎて行つたが、ふと、少尉を見て、

『田中少尉殿ではありませんか』

『やあ、貴樣は此處に居るか』

『え、後方勤務に殘されて、……もう、少尉殿、御病氣は好いのですか』

『ム、もう治つた。聯隊は遺つた相だが、本當か。』

『え』と上等兵は得々として、『昨日、彼方から歸つて來たものに聞いたですが、聯隊は酷く遺られたですよ。渡邊聯隊長は重傷を負はれるし、貴方の隊の市川大隊長殿は戰死なされるし ……』

『え、大隊長が戰死？』

少尉の胸には今ぞ無念と悲哀と羞恥との情が交々集つて、殆ど堪へ難くなつたのであらう。默して唯齒を喰ひしばるのであつた。

自分も烈しく感せずには居られない。

『聯隊長殿の負傷も、大隊長殿の戦死も實に勇ましかつた相です。』と上等兵は言葉を續いで語つた。『旅團長閣下の命令が中々勇ましかつたですから：後備は役に立たぬと他から思はれて居るから、その名譽を恢復するのは今ぢや。首山の東南方高地はその聯隊で占領せよとの命令でしたから、それは中々勇しい働を爲た相です』

『それで占領したか』

『占領した相です』

『實に殘念だナア！』

其一句には實に血が躍つて居た。

此時、貨車は動き出したので、上等兵は禮を施して彼方に去り、少尉は自分の傍なる行李の上に腰を休めた。

二人とも默した。

二人とも遼陽の戰を思つて居るのである。

それから二里ほど進むと、勾配が下り阪になつて、其間の貨車の早さと言つたら、丸で本物の汽

車と少しも違はぬ。甘泉堡あたりを通る頃は、殊にその速力が增して、山も、野も、村も唯一走りに走るのであつた。新臺子に着いたのは、もう日の暮るゝ頃、向ふを見ると、線路に添うた敵の監視兵の小さい洋館がしよんぼり立つて居て、其屋頭には日章旗が夕風に翻つて居る。線路の沿道には、馬糧のかますや糧食の俵やらが山のやうに積まれてあつて、彼方の面白い形を爲た山には暮色が既に蒼然として至つて居つた。

日章旗の翻つて居る家屋は兵站司令部。其處に行つて、今夜鞍山站に向つて發する貨車があるかと聞くと、夜の三時頃にあるけれと、これは重要なる彈藥を運ぶのであるから、便乘は許されぬとのこと。餘義なく此處に一宿することに決して、退院券を示して、食事傳票を請求した。ところが、遲く着いた補充の兵士やら何やらが一杯に集つて、待つて居ると中々容易なことでは無い。傍には、炊事場の大釜が三つまで据ゑられて、盛に飯を燒いて居る。そして其周圍には、もう傳票を貰つた兵士が飯盒を出して、我れ勝にそこに集つて分配を焦つて居る。

趣味ある夕暮の驛亭のことが思ひ出された。

辛うじて飯を得て、さて導かれた宿舍は、五町ばかり隔つた、同じく線路に添うた、監視兵の建物で、其處に行つた時は、もう日が暮れて眞闇になつて居たが、其入口の處に、酒保が大釜に火を

燃して、頻りにしることを兵士に賣つて居るのを見た。

自分等の寐た室は、酒保の店と狹中合になつて居て、幸ひ其處に日本酒があつた爲め、田中少尉は麥酒の空罐に一杯詰めさせて、自分にも飲めと言つて勸めて呉れた。日中は暑くつて凝らぬのであるが、夜は秋の中頃でもあるかのやうに冷やりとして、野にはさびしい秋の風、壁間にはこうろぎの聲が言ひ知らずあはれを催して、病後の身の、自分はさま〳〵のことを思つたので。

夜半、厠に野外に出ると、廿五日の月が遲く山の端に上つて、空には、天の河が白く靡き渡つて居た。

露が深く、虫の音が野面一面。

九月五日（月曜日）晴

朝、非常に黑い雲が前山から大空を蔽つて、恐ろしい驟雨が今にも遣つて來さうに思つたが、ぱつつり〳〵顏に當つた位で、貨車に乘る時分には、もうすつかり快晴になつて居た。

鐵道線路の右の野に見ゆる二三の洋館、あれが湯崗子の溫泉だなどと聞いたが、態々そこに行つて見る程の元氣も無かつた。次第に登り阪になれる一小山嶺を越えると、一里ばかり彼方には丁度

駱駝の背のやうな岩山が突兀として聳えて居る、其鞍部には一道の溪流。これが所謂

鞍山站の險

滿州には珍らしい美しい溪流の屈曲、それを右に見て、其山嶺の鞍部を向ふに越えると、溪流には立派な鐵橋が架せられてあつて、鞍山站の停車場はそれから五町ほど北にある。兵站司令部は其附近の重なる家屋を以てこれに充て、日章旗は翻々として、其屋上に翻つて居た。

刺を杉江司令官に通じて、戸外の休憩場に出て休んで居ると、少時して、司令官は傍に來て、

『君、それア、實に三日の日などは烈しかつたよ、そら向ふに』と前に連れる長い丘陵を指し、『丘陵が見えるだらう、あの丘陵の上に幾つとなく眞白に炸裂して、それア、此處で見て居ても、冷々するやうだつた……』かう言つて、笑ひながら自分の肩を叩いて、『歌人は居ながらにして名所を知ると言ふが、君などもその方だらうナ。うんと見たやうなことを書くんだらうナ』と言つた。

でなくつてさへ、遺憾なのに……

見渡すと、鐵道線路は一直線に其前に通じて、次第に高くなり行く長丘の上には、日に閃めいた雲が美しく靡き渡つて居た。これ皆な四五日前にわが軍の勇しく行進したところで、陶官屯、八卦

溝、立山屯などの部落は皆この間にあるのである。

遺憾、實に遺憾。

首山の激戰に奮戰して重傷を負つた、後備第十二聯隊長渡邊大佐（勝重）が、丁度この地の野戰病院に收容されて居るのを聞いて、忽惶訪問に赴いた田中少尉は、待つても待つても歸つて來なかつたが、四十分ばかり經つてから、漸く悄然として彼方から。

近寄つて、

『何うでした！』と訊くと、

『いや、實に私の訪問したのを非常に喜んで與れて、殆ど泣かぬばかりの有樣でした。聯隊長は後備で、年を老つて居りますので、大隊長や私などでもよく氣が合ふ方であつたですから、市川大隊長の戰死を非常に口惜しがつて、自分の負傷よりも却つて其事を繰返して居られたです。傷所ですか、傷は右の肩から左の肩へ打貫かれて隨分重い方だ相ですけれど、中々元氣で、日露戰爭實記などを繙いて居られたです。私は今更面目なくて聯隊に歸れないと申したら、いやそんな事があるものか、それよりも、君の病氣は惡い重い症と聞いたが、もうそんなに歩いて來て好いのかと言はれた。私は、其時は涙がこぼれて、實に何とも返答を爲ることが出來んでした。』

と言つたが、さま〳〵な感が胸も狹しと集つて來たと見えて、低頭いた其眼には、既に涙が閃めいて居た。これも理である、戰友皆な多く死傷して、自己一人取殘されつゝ、徒らにこの新戰場を過ぎ行く身であるものを。

滿車の線路を二里、陶官屯以北の長丘近く行くと、其斜面の草野に美しく日に光つた二三のテント、其處にはわが兵士の點々として歩いて行くのが見える。近くと、それはわが砲工兵の作業場で、其處には四五日前の戰に鹵獲した敵砲八門が並んで据ゑられてある。これは敵の公報に、泥濘の中に陷りて引き去る能はざりしと言ふもので、直せばまた使へるなどゝ言つて居た。日陰なく、暑くつて堪へ難かつたが、幸ひに、傍に酒保が店を開いて居つたので、其積み重ねた荷の蔭に行つて暫く休んだ。そして、源氏豆、堅パン、佃煮の小罐などを買つた。

陶官屯から八卦溝へと赴く路は、蜿蜒たる長丘、緩かなる傾斜を爲して、ところ〳〵に美しい楊の樹が涼しい蔭をつくつて居る。其蔭には、昨日營口から上陸したといふ第卅四、第十八聯隊の後備兵が幾隊となく休憩して居て、『何うも昨夜一晩寢ずに歩いたので、眠くつて仕方がない』などゝ言つて居るのもあつた。ことに、此附近からは、鐵道線路を歩いて辿つて來る遼陽の負傷兵次第に多く、或は繃帶した腕を右肩から釣つた者、或は頭部に全く繃帶を施した者、或は杖を力に片足を

引摺る者等、多くは赤十字の赤い徽號の着いた白衣を着て、(中には血に染んだ代赭色の軍服其まゝなのもある)とぼ〳〵と辿つて來るが、其の慘憺たるさまは實に眼も當てられぬばかりである。まして、此間を縫つて、をり〳〵貨車が進んで來るのであるが、――其中には重傷者が群を爲して、其苦痛の聲は絶えず野外に洩れて聞えるではないか。(寫眞の十四)

悲觀せずに誰が居られやうぞ。

八卦溝の高地を稍下ると、立山屯の一村落は、直ちに沙河一帶の平地を開き、其の中央には、暗紫色をした一小嶺が突兀として聳えて居る。この小山脈こそ敵が據つて頑强に戰つた首山であるであらうなどゝ少尉と語り合ひながら歩いたが、猶それを確める爲めに負傷兵に問うと、果して首山!

一兵士が語つて言ふには、『實に、あんな無茶苦茶な戰爭はありやしません。死ぬと覺悟して進む、さうすると、屹度死ぬのですからナア。敵は中々頑强で、首山の東南方高地などの防戰、それは見事でありました。私は六師團ですが、首山の下ではえらく遣られましたぜ。鐵條網、狙撃の間々に、敵は機關砲を据えて、バリ〳〵打付けるのですから、それは實に堪らんです。けれと、かうなるともう無茶ですから、死ぬなどは何とも思つて居りは爲ません。彈丸は丁度雨か霰が顏を打付る

位に考へて居るですからナア。』

斜阪を少し下ると、沙河兵站司令部。其處にも同じく糧食彈藥が山のやうに積まれて、兵士の集ること實に堵のごとくである。これは皆な第十八聯隊後備の、前進途中食を乞へる者で、兵站部は此上なく雜踏を極めて居る。

此處から遼陽まで三里、平生ならば、まだ日は高いし、行けぬことは無いのであるが、病後羸弱の身、ことに此處まで來ても、まだ軍司令部の位置が分明と解らぬので、田中少尉を强ゐて賴んで、今宵は此處に一緒に泊つて貰ふことに爲た。

兵站司令部で聞くと、宿營は無い、將校でも何でも露營して貰はなければならぬとのこと。それを病人であるの、何のと賴んで、漸く宿舍掛の曹長に就いて聞くと、それでは御氣の毒ですけれど河南まで行つて下さい、(河南とは沙河鎮の河南屯で、其處から其村の楊樹は見えて居るけれど、距離は大凡十町位あらう)其村には、兵站部で特に將校の宿舍用にと取て置いた家屋があつて、それはこれ〳〵しか〳〵の處にあると敎へて呉れた。

自分等はそれを信じて、其儘河南屯へと志した。沙河の鐵橋の手前を右に下り、野原の間を五六町辿ると、遼陽街道は泥濘の波を濺らして、其處には衞生隊、電信隊、輜重車などが泥まみれに

なつて進んで行く。村に入つて、二つ目の路を左に入つた四軒目の家屋と敎へられたので、其處に行つて見ると、將校の宿舍用どころか、孰れの家屋も皆な遼陽の負傷者を以て充されてある。非常に困つてまご〳〵して居ると、丁度街道に沿うた大きな家屋に田中少尉の部下の兵士が居たので、漸くそれに頼んで、その一隅に寢かして貰ふことに爲た。

夜、疾風雷雨、扉の無い室には烈げしく降り込んで、終夜穩かに夢を結ぶことが出來なかつた。

九月六日（火曜日）晴

朝、寐起きに、田中少尉は沙河兵站司令部に、朝餐と苦力とを得に行つたが、折惡しく苦力が居らぬとかで、八時半頃、漸く歸つて來た。さて、昨日と同じ線路を傳つて遼陽へと向つたが、線路を辿る負傷兵は愈〻多く、路は殆ど是が爲めて塞げらるゝと言つても好い位。三十日、三十一日の

首山の激戰

に全砲兵を布いたといふ沙河の大鐵橋を渡たり、一路坦々たる線を北に進むと、首山に連れる丘陵は漸く明かに、敵の據つた陣地もそれと指點せらるゝのであつた。田中少尉は兵士に逢ふ毎に、其の所屬の聯隊の名を問ひ、且つ厭かずに、その連日の戰況を聞くのて。

行けば行く程、首山の影は近くなつて、亂れたる高粱畑、踏み躙られたる鐵條網、敵の砲彈殼の處々に散亂せるなど、一つとして昨日の激戰を語らぬものはない。平野の中央、高粱畑の上高く、二三株の老松のさながら傘を張つたやうなのを、一兵士は指して、彼處は關谷第三十四聯隊長（銘次郎）の戰死したところであると自分に語つた。第三十四聯隊は第三師團の靜岡聯隊、この聯隊には、かの橘少佐が第一大隊長を勤めて居られる筈、聯隊長が戰死した位では、もしや……もしや……と思つたので。

『橘大隊長は？』

と自分は問うた。

『橘大隊長殿……』と兵士は口籠りて、『大隊長殿も勇ましい名譽の戰死を』

『戰死』

自分の胸は俄かに波立つた。

すゞ思ひ出されたのは、送別の夜、別離の言葉。

猶詳しく聞かうとしたけれど、其兵士はあまり深く知つて居らぬので、自分は餘義なく別れて、

線路を傳つた。あゝその線路、負傷兵と後援兵との旁午相往來するその長き線路を自分はいかに深く少佐のことを思ひつゝ辿つたであらうか。少佐には宇品以來實に一方ならざる恩恵を受けて居るので、自分等寫眞班は實に少佐の爲めに悲なく此軍に從つて居ると言つても好い位である。であるのに、今、此處で、その悲しい戰死を聞かうとは！

送別の夜の光景、悲壯なる別れの言葉、今更に思ひ出されるのは、運命の明らかに徂徠したさまで、自分は思へば思ふ程、涙に袖を絞るのであつた。

首山の麓近く行くと、マエトーレの村落。其前には半ば建築し懸けた兵舍柱のが人間の骸骨のやうに高粱畑の中に突立つて居て、其の向ふに鐵條網が長く廣く敷設されて居るのが眼に入る。首山の標高九十九米、丘陵小嶺はそれから長く東南に延びて、わが左翼軍に對せし頑強なる敵の陣地は實に一眸の中に集るのである。ことに、其丘陵の幾層々、塹濠掩堡の丁度鉢卷を爲たやうに連つて居るのを見ると、其當時の苦戰の狀況も思ひ遣らるゝので、此一帶の地に炸裂した砲烟の凄しさも、殆んど眼前に見えるやうな心地がする。——この大戰、これを見るを得なかつたわが身の遺憾は？

マエトウレの村を掠めて、第六師團、後備十二聯隊の戰死者の其儘葬られた慘憺たる戰後の光景

を見ながら進むと、線路の上に、哨兵が立つて居て、軍司令部は其傍の孤家子に滯在して居るといふことを敎へて呉れた。喜んで、田中少尉に別れて、其村に行くと、軍司令部は今將に遼陽停車場に其宿舍を移さうとしつゝある處で、わが寫眞班の諸君は既に早く出發して居た。

餘儀なく大本營寫眞班に行つて、小倉君を訪ねた。

『橘さんは戰死爲すッたつて』

『實に何うも』と小倉君も悲哀に堪へざるものゝごとく、『御氣の毒で、何とも言へん。僕などもそれと聞いた時は、實に驚いたです』

『詳しいことを御存しありませんか』

『イヤ、まだそれ處では無い』

猶色々語り合つたが、今、出發するから、一緒に行き給へと言ふので、其儘その一行に從つて、自分も遼陽へと向つた。

首山の麓から遼陽まで約一里半、其間の平野は高粱畑、てなければ粟畑で、鐵道線路に添つた邊には、敵味方の掩濠が縱横無盡に掘つてあつて、小銃の彈筒、彈殼、外套などが其處等一面に散はつて居る。そして其間には味方、敵の區別なく埋めたらしい戰死者の新墳が高く低く築かれてあ

る。一望すると、遼陽の城壁はもう眼の前に畫のやうに見えて、西門と南門とが殊に眼に立つ。停車場附近には、戰後混雜のさまが猶明かに、糧秣の兵燹は天を焦して、その黄い、薄黑い畑の間からは、かの有名なる遼陽の佛塔が高く高く顯はれて居る。

行く〳〵大本營寫眞班の人は自分に語つた。

『實に、今度の戰爭は酷かつたです。毎日々々朝から晩まで砲を打つて打つて打盡して、そして又翌日もその通りなのだからナア。我々、見て居つても何うなることかと思ふ位でした。それにしても、强いのは味方の兵。どうもよくあの位まで忍耐すると思はれるです。例へて見れば、突擊を遣る、占領する、又逆襲されて追返される、又すく跡から他の隊が續くと言ふ具合で、流石の敵もあれには驚いたに相違ないです。我々は命令ですから出來る丈け第一線に出て、旨く行けば、敵の混亂する光景、味方の突擊するさまなども撮り度いと思ふですから、隨分危險なところまで出懸けて行つたですが、それは實に危かつたです。一體、生死の境に、寫眞の機械を据ゑるなゝどは隨分暢氣な沙汰で、機械を据ゑると、よく敵から目標にされて、打付けられるので困つたです。ことに、四ッ切は大きい者ですから機關砲とても間違へられると見えて、殊に烈しく打付けられるです。砲戰、え、砲戰の光景ですが。それは中々盛で、三十日、三十一日の二日、つまりこの首山の攻擊で

すナ、これか實に見事でした。まア、大石橋の戰、あれと稍似寄つて居て、あれの長く幾日も續いた奴ですナア、御覽の通り。』と首山一帶の山脈を指しながら、

『敵の砲兵陣地を布いた山脈が、高さこそ低いが、丁度、大石橋の青石山、望馬臺、太平岑などの陣地とよく似て居りましたから、まア、あれの幾日も續いたものと見れば好いです。それから、砲戰の中で、一番見事でしたのは、卅一日夕暮の味方の砲擊で、丁度、其夜は電光……。何でも、七時頃から、明日は首山の敵壘を陷れるのだから、砲彈を惜むナとの聲懸りであつた相で、打つたにも打つたにも、それは實に打つたです。先、私達は沙河鎭の河南の傍の三十米ばかりの山で見て居つたと御想像なさい。敵の據つて居る陣地の後景は、丸で夕立の時のやうな黑い、凄しい雲で一面に包まれて居つて、それに、電光が盛んに閃めく。否、盛んな位ぬては中々形容が出來んので、殆ど一瞬間もその電光の閃めきが絶えないと言つた方が好いでせう。その電光の山、それに味方の砲彈が、黑く白く――いやもう日が暮れて居つたですから、破裂する度に火か見える、それが雨霰と敵の陣地に注ぐのですから實に面白い。私はあんな壯大な光景を見たのは始めてです。』

『雷鳴は爲たですか。』自分は問うた。

『いや、電光ばかり、雷鳴は少しも爲ませんでした。』

『それは、壯觀でしたらう』
『實に壯觀！』

遼陽の高塔

は次第に近く、停車場附近の家屋も稍々明かに辨せらるゝやうになつた。所々の村落にはわが兵士充滿し、其野には戰死者を火葬する茶毘の烟。これを見ては誰か涙を注がずに居られやうぞ。まして時は既に秋。野には白き海の穂。

『それから、其翌日』と寫眞班の一人は言葉を續いて、『兎に角首山が取れて、是から遼陽は平押、と高を括つて居つた處を、敵の第二線は尙遼陽の前面の平地に一面に延つて居つて、右翼の第三師團が新立屯まで行つて、酷く打付けられた相です。て、其日は、敵味方兵も疲れたので、午后からは大した砲戰もなく、互に交綏するといふ有樣でしたが、翌日は又大々的砲戰。遼陽附近は丸て砲烟に埋づめられて了つたです。殊に、私の見て居つて、愉快でしたのは、その首山のすぐ下の處に、味方は南山で分捕つた白砲四門を据ゑて、盛に敵の停車場を砲擊したです。御存の通り、敵の汽車、これは實に癪に觸る、得利寺にしろ、蓋平にしろ、大石橋にしろ、いざ退却となると、いつ

ても、ピーと、逃げて了ふ。何うか、あれを後へでもこつそり廻つて、思ふさま打つて遣り度いと思は私ばかりではない、誰も思つて居たてせうが、今度分捕砲でうんと酷めて遣つたのは、實に愉快でした。首山の麓から停車場まで八千か九千米突ありましたが、重砲ですから彈が樂に屆く。獨つて、敵の速射砲は六千位しか屆かんのですから、安心して笑ひながら打つて酷めて遣れる。私は其光景を撮影しましたが、それは愉快の極でした。』

『それで敵は何うでした？』

『打たれると、停車場に集つて居る兵士等が蜘の子のやうに散つて行くさまがよく見える。何でも貨車列車にも五六發は中つたでせう。黃い、白い、黑い烟が一簇になつて高く揚つたのが見えたです。そしてそれから、汽車を餘程背後につけるやうになつたです。』

『それは愉快でしたな。』

『そして、其日は終日打つたが、矢張、遼陽の敵陣が陷ちない。餘義なく其夜は今日まで居た村に泊つて、翌日また五時半頃から始めた。私は、首山の半腹の處に登つて、其光景を見て居たが、敵の砲は中々盛で、右翼の第三師團の方には實によく來て居つたです。あれは何時ごろでしたか、何しろ午前の中でした、私等の登つて居る山腹の向ひに第六師團司令部の將校達が黑くなつて觀戰し

て居られたですが、後から滿州軍司令部が遣つて來る、第二軍司令部が登つて來る、忽ち其處が人馬で一杯となつて了つたが、私等は其れを撮りながら、猶其處を下りずに見て居つた。」

『兵燹の擧つたのは何時頃です。』

『左樣、十一時頃から、敵は糧秣に火を點け始めたので、時の間に、それが大きく、各所に黑く凄い烟が擧つて、あの塔などは隱れて見えなくなる位でした。すると、其前後の光景、それが又忘れられない、追擊！　追擊！　敵は退却！　などの聲が到る處に滿ち渡ると思ふと、今まで何處に躲れて小さくなつて居たかと思はれるばかり、味方の歩兵は彼方からも此方からも集つて來て、いかにも嬉しさう、いかにも元氣の滿ちたやうに眞黑になつて先へ先へと進んで行く。實際、その光景は勇ましかつたです。けれど敵の頑强に防いだのも、亦爭はれぬ事實で、其時分出て行つた兵が、敵の砲が烈しいので、出は出たが、其日は何うしても遼陽に入ることが出來なかつたですからナア。』

『成程……』

自分は只聞惚るゝばかりであつた。

『今少し先に行くと解るですが』と、停車場近くなつた線路を指しながら、『この線路の右と左に居た敵の砲が非常に頑强で、打つたとも、打つたとも、それは實に打つたです。砲數は二箇中隊、敵の砲兵組織は一中隊八門ですから、都合十六門ですけれど、それが實に四角八面、左から右へと懸けて滅茶苦茶に打つた。つまり敵の大兵退却の爲め、犧牲になつて殘つたのでせう。それ、御覽なさい、其の彈殼……』

指されて、見ると、線路の左右、敵の打つた砲彈の殼は實に小山のごとく堆かく散亂して、その眞鍮の黃なる色は閃々と日の光に閃めきわたるのであつた。傍には、彈丸を入れたる黃塗の箱、幾百幾千となく重り合つて居る。

『成程打つた！』

自分も驚かざるを得なかつたので。

『かういふ風ですから、味方の歩兵の出られなかつたのも無理はないです。そして、敵は日の暮れるまで打つて、夜になると、その犧牲に殘した砲をも安全に引張つて、悲なく退却して了つたです。敵も中々味を遣りますよ。』

『左樣ですナ。』

線路は、既に停車場に入つて、敵將クロパトキンが一二日前までその本據とした一帶の地は明かに

わが眼に映して來た。わが重砲彈に破壞された家屋、敵が火を放ちて去つた兵舍の棟木など、その混亂の光景は實に想像に餘りあるので、破壞せられたまゝ線路に横つて居る貨車二三輛、其附近に立てる家屋の檐、屋根の壁など、一つとしてわか砲彈の痕を留めぬものは無い。

糧秣の小山は猶盛に燒けつゝあるで。

遼陽は敵が本據として盛に經營した地、ことに其の停車場は大石橋と共に二等停車場の要衝であつたから、その設備は頗る壯大で、官舍兵舍なども、隨分立派なのが多い。

軍司令部はこの停車場附近の家屋を以てこれに充てたので、自分等は直ちにその豫め定められた宿舍にと入つた。けれどわが從軍寫眞班の諸兄、新聞記者の諸君は、戰場撮影戰況視察に忙しいと見えて、まだ一人も其處には來て居られなかつた。漸く柴田君亘君の歸つて來たのは午後三時頃、自分を見て驚くこと一通ではなく、

『何うして、かう早く』

と問うのであつた。

『だッて、砲聲を聞いて、ぢつとして居られるものか』

かう自分が答へると、

『それア、實に惜しかつたよ、君。それア實に大戰で、激戰で、苦戰で、君に見せたら何んなに喜ぶだらう……と言ひ〳〵僕等は見て居つた』と亘君は言ふ。

『もう言つて呉れ給ふナ、それてなくつてさへ、口惜しくつて堪らんのだ』自分は唯かく言つた。

夕暮、坪谷君も戰況視察から歸つて來て、幾重にも自分の病氣全快を喜んで呉れたが、聞くと、一行はもう歸る準備を爲て居るのてある相て、成べくは明後日あたり歸國の途に就き度いとのことてある。けれど、撮影やら視察やらで、さうとても急には歸れぬと言ふのて、それては一日延して九日に出發するから、その積りてと坪谷君は言ふ。夜、小笠原長政君から首山、遼陽——ことに

橘少佐戰死の狀況

を詳しく聞いた。小笠原君の語られるには、『今回の戰爭は、まア、譬へて見れば、南山に大石橋を交ぜて、そしてそれが幾日も續いたやうなもの。私は河南の右手の觀戰山で見て居たが、毎日毎日打つては取れずに日が暮れる、實に何うなることかと心細い程でした。てすから首山一帶の山の取れた時は、それは實際欣喜雀躍で、私などは第一に飛出して、先づ、其戰場へと出懸けて行つた。行つて見ると、首山一帶の敵の陣地の中でも、三十四聯隊、左樣橘さんの戰死した隊です。そ

の聯隊の向つた山が一番堅固な防備が施されてあつて、いつも御極りの鐵條網、それに狙撃があつたですが、それが今迄見たのとは違つて、深いことも深いし、其の穿の底に、落ちたら刺されるやうに鋭利な鐵棒が立てられてある。實に、それは行き屆いた者だ。君も來る時、見て來られたでせうが、首山の麓の、線路に添うたところに、一つの村落があつて、其前に鐵條網、それから少し前に、兵舎の半ば建築しかけた柱が何かの防備か知らんと思はれるやうに立つて居るのを見たでせう。あの附近が實に激戦の區だつたので、第三十四聯隊は右を行く、第六師團の一部は左を行く、敵は又この村落に據つて頑強に抵抗し、其後の、小さな池のある、その向ふの小高い處に、二三門の機關砲を据ゑて、滅茶々々に打懸けるといふ有樣、味方はその附近でえらく遣られたです。私は、先、卅四聯隊の突撃した丘から登つて見たが、敵の掩堡が二段に築かれてあつて、その長い掩堡は丸で死骸！　丸で味方の死骸で埋められて居ると言つても好い。それは實に見るに忍びんでした。南山の戦でも、隨分死骸を見ることは見ましたが、あれは多くは敵の死骸であつたので、まだ少しは好かつたですが、今度は皆わが同胞……。

語り懸けて、言葉を留めた。其時の慘狀が胸に湧つて來たのであらう。やがて言葉を續いで、「それに、一番殘念なのは橘少佐です。お互に宇品出發以來、何んなに御世話になつたか知れんですから

ら！　君も知つてるが、實際人格の大きかつた人で、あの位しつかりした人は軍人にも珍らしい。私は、其翌日だつたかしらん、柴田君と一緒に、池のある村落の方へ寫眞を撮りに行つて居たですが、其所でゆくりなく邂逅したのが、橘さんの馬卒。あの時ばかりは私も泣かずには居られなかつた。何うです、君、馬卒は橘さんの遺骨と、其の奮闘した軍刀とを持つて、此方へ來る處でしたので。先生、僕等を見ると、すぐ泣き出して了つた。其れも其筈でせう、私等は軍管理部長として橘さんにはよく御世話になつて、其の馬卒の顔をよく知つて居りましたから、私等もこれを見ると意氣地なくも胸が塞つて、何うしても言葉が出ない。遂々、名譽ある御戦死を爲すつた相ですねと言はうとしてもそれが出ない。馬卒は亦馬卒で、涙を拭ひながら默つて、其の軍刀を私等に見せるので、其軍刀には實に少佐の勇ましい最期の程が明かに殘つて居たです。先づ、切先から二三寸ばかりは、丸で鋸の齒のやうに滅茶〳〵につぶれて、血が夥しく黑く乾いて貼いて居たが、鍔の處には彈丸が透した痕が穴になつて殘つて居る。少佐は其時、屹度手に一彈痕を受けたに相違ないです。實に、あれを見た時にはいろ〳〵厚い世話になつたことや、よく私等の宿舍に來て、何も不便なものは無いかと言つて臭れたことや、その威嚴ある中に一種小兒をも懐かしむるやうなやさしい容貌や、何や彼やが潮のやうに集つて來て、傍を向いて泣かずには居られなかつた。馬卒の話すの

には、實に殘念でした、私の漸く探して參つた頃には、もう瞑目なつて入らしつて、いくら動かしてももう動かない。其朝、いよいよ突擊で、御發になるといふ時、私を呼んで、正午までには何んな事があつてもあの山を占領するから、占領したことが解つたら、馬と盞飯とを持つて來いとの御命令。さて、何うなることかと見て居ました。始めはもう取れそうなもの、もう味方の國旗が立ち相なものと思つて見て居りました。けれど中々そんな樣子がありません、十時十一時になつてもまだ其の山に敵が居て、盛に味方を打つて居る。これは何うしたのか知らん、旦那の御身の上に何か異變がありやせんかと思ひながらも、十二時近いから、盞飯の準備をして、いざと言つて來たら、すぐ行かうと、馬にも充分の糧秣を遣つて憩きました。一時、二時、何とも言つて參りません。三時になると、段々味方が遣られたことが解つて、旦那も御負傷なされたのを內田軍曹殿が介抱して居られるのを見たと言つて知らせて呉れたものがありましたので、それから、私は驅ぎ出したです。馬も辨當も投り出して、彼方此方と探して廻つたです。けれど敵がすぐ上の山に居て、身を顯らはすと打たれますから何うするとも出來ません。到底六時過迄まご〳〵して漸く探し出した頃には、もう御瞑目、實に殘念で殘念で堪りません……と言つて、おい〳〵泣くので、私等も見るに忍びんかつた。本當に、橘さんは人望のあつた人で、誰でも其の精神の確かりして居るのと慈愛心の深

いのとに、崇拜の念を起さぬものは無かつた相です。現に、第三十四聯隊に赴任したのも、つい此間、まだ一月と經たんのですけれど、其隊の士氣は全く振つたと言ふことですからナア。」

橘少佐が嚴肅なる容貌が眼前に見えるやうな心地が爲た。

「それに、平生教育家を以て自ら任し、躬行實踐を以て其第一の主義と爲し、其思想の高潔なる、實に、古武士の風があつたといふことです。其庵で、選拔されて一時東宮殿下に御劍術を御指南申上げたことがあつた相ですが、それを一生の得易からざる榮譽と信じ、戰死する時にも、其日は恰も東宮殿下の御誕生日であることを記して忘れず、御誕生日に戰死するのは、實に軍人としての本望であるが、この目出度い日に多くの味方の兵を殺し、しかも一度占領した丘陵を敵に奪ひ回さるゝのは、いかにも殘念であると、死ぬまでそれを言つて居つた相です。」

「戰死した光景を詳しく話して呉れ給へ。」

「戰死した光景？　これはその、最後まで世話した軍曹の內田清一といふ人から聞いたのですが、三十四聯隊の突擊を始めたのは、卅一日の午前五時で、橘さんは第一大隊を率ひて山に向ひ、第三大隊は遼陽街道の左を行つたとのことです。山は前にも言つた通り、二段の配備を爲してあつて、麓及び頂上に立派な掩堡が築かれてあつた。橘さんの隊は、鐵條網狼穽などの間を辛うじて入つて、

漸く其山へと取附いた相ですが、これが何でも六時頃で、まだ漸く夜が明放れたといふばかり、霧か薄くあたりを置めて居つたといふ事です。橘さんは勇闘奮戰、難なく第一の掩堡を取つて、續いて敵の頑強に抵抗するのを追拂つて、愈々山の上へと登つた。山の上に登つた時には、ある必要から、日章旗を建てたり、萬歳を唱へたりした相ですが、山の頂が生憎く狹かつた上に、敵の豫備隊がすぐ其下の谷に澤山集つて居つたものですから、暫くすると、それが盛に盛返して來た。橘さんは、劒術の達人で有名な人でありますから、攻上る時にも、隨分先に進んで敵の一人二人を手づから斬つた相ですが、いざ敵が盛返して來るといふのを見て、こざんなれ、眼に物見せて呉れんといふ勢で、其軍刀を振翳して、頻りに敵と搏闘した。けれど、四面から其一點に向けて打懸る敵の砲がいかにも烈しい。橘さんは最初に、刀の鍔から手に抜ける小銃丸を受け、間もなく、下腹に一丸を被つたが、更にこれに屈せずして、いかにもしてこの山の占領を確實に仕度いと、頻りに自から指揮を爲れて居た相です。けれど、敵の逆襲がいかにも烈しいので味方は段々追退される、果ては山上が保ち切れぬといふ有樣になつた。此時、橘さんは臀部に彈丸を受けられた相ですが、この傷痍が重かつたので、遂に其處に倒れられて了つた。それから後は、内田軍曹が百方これを介抱し、兎に角掩蔽の中へと引入れて、何彼と力を盡したが、何分にも、敵の逆襲が烈しいので、味

方はどし〳〵退却して了ふ。少佐は又少佐で、何うしても引くな、死ぬなら、この占領した山の上で死ぬと言ふので、この取扱に一方ならず苦心したと言ふことです。けれど何うしても此處には居られぬので、これはこの山を爽てゝ、退くのではない、其下は重傷を負はれて居るから……と色々なだめ賺して、抱いて山を下りる途中、また一つ彈丸が來て、少佐の胸を貫き、更に軍曹の胸部を貫たので、二人は其處に斃れたまゝ少時は氣絶して何をも知らなかつたといふことです。其中に氣が附くと、味方は既に大方退却して了つたし、傍には味方の死骸が累々と山を築くばかりになつて居るし、敵の砲は依然として烈しいので、餘幾なく遣うやうにして少しく低い凹地に入り、其處で少時介抱して居た相です。少佐は此間にも絶ず占領したところを捨てるな、皇太子殿下の誕生日にから多くの兵を殺して申譯が無いと言ひづめに言つて居られた相ですが、午後四時頃になると、目はうるんで動かなくなつて、自分でももうとてもいけぬと覺悟したらしく、六時頃になつて、遂に瞑目されて了つたといふことで、それから日の暮るゝのを待て、傷者の比較的輕傷なるものを集め、急造の擔架を作つて、それに載せて陣營地に歸つて來たといふ話です。』

自分は默してこれを聞いたが、しかもかの海城の夜の送別の宴を思ひ出さずには居られなかつた。實際、考へると、宇品から上陸地點、南山から得利寺、大石橋と少佐が時に由り、折に觸れて、さ

ま〳〵の紀念を明かに自分等の頭惱に刻んだのは、竟に忘るゝことが出來ぬので、少佐の德は死して猶自分等の胸に絶大なる感化を與へるのであつた。

涙の中に得たる歌四首。

さま〳〵に受けしめぐみも今ははや酬ひんよしも無くなりにけり

かの夜半に人とつとひてにきはしく別れしだにも悲しかりしを

砲の烟しろくたゝよふあら野邊に逝きつる君は悲しかりけむ

まこゝろの底より出でしこの涙あゝこの涙君ようけませ

此夜は遲く迄眠られなかつた。

九月七日（水曜日）晴

明後日は愈々蹄國の途に就くと言ふので、せめては遼陽附近のさまでも少し探つて見やうと、病餘羸弱、五六町も容易には歩けぬ身の勇を鼓して、小笠原君と一緒に出懸けた。停車場附近はわが軍の砲彈を蒙りて、破壞甚しく、壁、扉に其痕を留めぬものは無い位。敵將クロパトキンの本營は線路の東北に位して、無數の洋館の、丁度中通りの右側になつて居るのであるが、其構造は頗る

意を用ゐ、擔の破風造を爲せる、扉に矢形の模樣を畫きたる、庭に西洋草花を滿植したる、流石に敵の大將の住宅であると點頭かるゝのであつた。それに、鐵道線路は直ちに其家屋の前に達し、何時にても出陣なし得らるゝやうになつて居る。

殊に、自分の勇しく感じたのは、其前にはわが哨兵既に銃劍を携へて立ち、其扉にはマンシュウクンシレイブの白布の風に飄るのを見たことであつた。

糧秣のまだぶす〳〵と燻つて居る間を向ふに出ると、線路には貨車客車の鹵獲せられたる者多く、一等二等客車の横はるを、日本のより美しいなどと評して居る兵士があつた。遼陽に敵の本營を置いた處だけあつて、其の設備も盛に、兵舍家屋の陸續として相連れる、敵の容易にこれを棄て去るを肯んじなかつたので道理であると思つた。（九月の十五）それから二三町前に出ると、かの名高い佛塔は、さながら連日の修羅の巷を知らざるものゝやうに獨り高く大空に聳えて居る。近くと、高さは淺草の十二層塔の三倍位、露人はその周圍に小さく公園を開いて居る。

遼陽城

はこれを距る、僅かに七八町、嚴然たる城壁は四方を圍み、西の一門屹として其前に聳えて居る。

海城、蓋平などに比べると餘程廣くも大きくもあるが、其構造や、位置は同じことで、只、道路が廿字形を爲して居るのが異つて居るばかり。市民はわが軍の入城を歡迎して、擔頭には必ず國旗を掲げて居るのではあるが、實は露國に同情を寄せたものが多く、わが軍の占領を憂ふる色は其面にあり〳〵と顯れて居る。聞くと、露國はこの支那住民の歡心を得ることに力をつとめ、兵士などは決して城中に入れなかつた相である。

西門外の第三師團司令部に、新愛知の記者新田靜灣君を訪ね、午後一時過、宿舍に歸つた。

遼陽城の東北を流るゝ太子河、其流頗る大に、深さ亦人肩を沒するばかりであるといふ。其流を渉つて來た東京日々新聞記者黑田甲子郎氏。氏の語る所を聞いて、自分は僅かに第一軍方面の戰況を知ることを得たので。今回の戰、第一軍はその左翼隊をして第四軍と連絡を保たしめ、右翼隊をして太子河の上流を徒渉して、敵の退路を扼せしめんとしたのであるが、謀畧半ばにして、敵が退路に大兵を派したるが爲、充分なる効果を呈する能はず、右翼大部隊は烟臺の炭坑を占領しながら、進んで、敵の退路を絶つの擧に出づることが出來なかつたので、敵は奉天街道に五縱列をつくつて、悠々退却し、その隊伍の亂れざる頗る見るべきものあつたと黑田特派員は語つた。且曰ふのには、第一軍のこの遼陽の平野に出づる困難はそれは〳〵容易に名狀すべからざるもので、山は

皆劍拔蠚立、路は多くは其絶巓へと通じ、一上一下、その輸送の困難、行軍の困難、到底口これを言ひ、筆これを狀することが出來ぬとのこと。宿舍の東北に連り合ひ亙り合へる千山萬岳、まことに、第一軍の來るや一方ならざる困苦を嘗めたのであらう。

柴田君、亘君は撮影の爲め城內城外の各地に奔走し、歸り來りて自分の爲めに狀況を說いて呉れるので、太子河の架橋既に半ば成らんとし、わが軍の砲壘また漸く完く、軍容の盛なる、實に天下を壓するの概があるといふ。ことに、其の河の對岸には、赤帽を被つた近衛師團の兵が既に三〻伍〻相往來し、第一軍、第二軍が漸く此處で完全に連絡が取れたかと、何となく愉快で堪らぬと語つた。自分も身に病なく、脚また昔のごとくならば、第一軍にある知人をも訪はむ、各師團に行つて、詳しい戰況をも聞かうものをなど思ひ煩つたが、今は到底それも出來ぬ身の、終日宿營舍の中に籠つて暮した。

遼陽の宿舍は、自分等が上陸以來始めて入つた露國の洋館で、其室は廣く淸潔に、支那土民の炕の上にばかり眠りつけた身には、實に都會にても行つたやうな心地が爲らるゝのであつた。けれど支那土民の平偏たき釜がなく、各自米を炊くことの出來ぬのは一方ならぬ不便で、これが爲め各部の人々、皆飯を炊事場に仰き、炊事掛の忙しさと言つたら非常で、自分等も亦半熟の飯を食はなけれ

ばならぬことに立至つた。

宿營舍前の低き階段――自分はつれ〴〵なるまゝ一人其上の扉に寄懸つて、病餘の人の爲るやうに恍惚として只意味もなくあたりのさまを見るを例とした。滿州の濶い野には、楊樹の黑くこんもりとしたる村落晨星のごとく散在して、他は皆一望涯なき高粱畑の上に、白い羊毛のやうな雲ふわふわと漂ひわたつて、其の間々に見渡さるゝわが步兵の行進、砲車の整列、そを指揮する將校の軍劍の鞘、それがをり〳〵日に閃めいて眩ゆく光る。自分の立つて居る階段の下には、壁に添つて、兵士が俄がに築いた小さな竈幾つとなく連つて、淸苦力二三名何事をか語り合ひながら、頻りに其竈に細き烟を立てて居る。最も階段に近き一つの藥罐には、湯已に沸きて、湯氣盛に立ち昇つて居るのを見た。前なる兵舍には、兵、馬卒等の互に罵り合ふ聲喧しく聞えた。

今聞く、其地には、雪ふりたりと。滿州地方氣候の激變せる、われ等が苦んだ熱い日影は、既にその溫さをも失ひて、其階段、其宿舍、其扉――今は遠征の人々風の寒さを詫ぶるのであらう。あゝ其宿營の光景今も眼の前に……。

自分は遼陽に入つたとは、名のみ。病餘羸弱の身の其附近の狀況――敵が頑强に抵抗した設壘陣の光景をすら仔細に視察する事が出來なかつた。況んや戰況をや。

夕暮になると、自分等の明後日の出發を聞いて、管理部から、葡萄を山の如く積みたるものを一箱、敵の棄て去つた角砂糖を五六百個、酒、二升を贈つて別離を盛にして呉れた。管理部の各將校には、自分等寫眞班が宇品出帆以來何んなに厚情を荷つたか知れたので、其恩はわれ等の終生忘るゝことが出來ぬものである。けれどあゝ人事の轉變の速なる、曾て部長であつた橘少佐は戰死し、大越副官は野戰隊の大隊長に赴任し、澤田副官また遠からずして戰線に出でやうとし、乃村曹長は既に騎兵旅團附の命令を受取つたとのこと。跡に殘れるは、秋月中尉、飯塚主計等の諸氏に過ぎぬのである。

で、其夜遲くまで、自分等は諸君の爲めた健康の盃を擧げたので。

九月八日（木曜日）半晴

明日は愈々お別れとなつた。

取り殘した寫眞やら、聞き殘した戰況やらで、坪谷君柴田君は頻りに彼方此方と奔走して居たが、午後からは好加減に切り上げて、さて出發の準備にと取懸つた。

小笠原君は一人踏留ると言ふので、器具萬般は皆な同君に殘して置くことに爲たが、林家屯から

雇つて來た忠實なる青年苦力も此處から軍に別れて歸るとのことで、自分等はさま〳〵なる物品を彼に恵贈した。ことに、柴田君の驢馬、これも渠が低價に買つて貰つたので、此上もなく喜んで、頻りに別離を惜んで居た。

參謀部、砲兵部、經理部、憲兵部等の諸將校に暇を告ぐるに時間を潰して、軍醫部を訪ねたのは、もう全く日が暮れ渡つた後であつた。先づ、井島、小島の兩軍醫にも厚く禮を述べ、森軍醫部長の室に音信ふと、鷗外先生は、闇の中に蠟燭も點さず、一人孑然として居られるのである。わが從軍中は、さま〳〵の敎をも受け、ことに、海城で病を得た時は一方ならぬ厚意を辱うしたのに、今は別れて遠く都に歸らんとせる身、御用事あらばなど言ふのも何となく佗しい。東京も惡くはないな……など言はれた中にも、そゞろ懐郷の情が顯はれて、軍國の爲めに、かゝるところに多を過し給ふ傷ましさなど思ひ遣られずには居られなかつた。夜、更くる迄物語して、いざとて暇を告げると、『君は風邪引いてるナ、ヘブリンを二三包貰つて行給へ。病後は注意せんければいかんよ』とて、軍醫に命じて、藥を賜はつた。此の厚情自分は何の日か忘れられやう？

われ等從軍寫眞班――六ヶ月雨に風にさま〳〵の恩惠を受けたわれ等は、明日を以て愈々このなつかしい軍にわかれ行かんとするのである。

健在なれ、わが第二軍。

九月九日（金曜日）晴

特に管理部から給せられた荷馬車二輛。それに寫眞機械一切を滿載し、病餘の身のわれは其上に跨りながら、愈々出發したのは、午前の九時。『愈々御歸國ですか、羨ましいナ』など、行逢ふ馬卒、傭人等に聲懸けらるゝも何となく名殘惜しく、晴れたる秋の日影の下に、自分等は一種狀し難き情を抱いて、この第二軍にわかれ行く……。

鐵道線路を離れると、路は逶迤として高粱の人肩を沒するばかりなる間に通じ、其間に、粟畑、大豆畑、秋風は既に蕎麥の花に遍ねく、思ひも懸けぬ路のところ〳〵に白く綿を敷いて顯はれたのなど、そゞろに自分の興を催した。をり〳〵過行く村落の角には、龍神土神を祭つた小さな祠があつて、四五株連り生じたる楊樹の一簇。砲車、彈藥車の幾列は其根元に斜に並べられて、砲身の燻れるを掃除しながら兵士の三々伍々何事をか相語れる、一つとして軍中の景ならぬはない。

高粱畑の間の幾屈曲、楊樹の簇れる幾村落、深き泥濘は車の輻を沒して、人も車も共に顚覆せんかと思はるゝ惡るい道路の陷落をも或箇處か過ぎて、首山の突兀たる岩石の麓を、孤家子よりマエ

トーレに向ひて進みしは、早十一時近い頃であつた。滿州の乾燥した空氣は、日の影を透明ならしめ、物の影を濃かならしめ、見渡す限りの碧落、只、處々に羊毛のごとき白き雲を漂はせるばかり、

新戰場

を吊ふには、餘りに美しく晴れた日であつた。

美しく晴れたる日の新戰場、けれどこの明かな日の光の中にも、猶ほ悲しむべく哭すべき影の能らぬであらうか。否、晴れた日の影にたゞよへる思、却りて曇り果てたる空に勝りて多いのはいかに。曇つたならば——秋風新墳の上を吹きて陰雲時雨を送らうとする時ならば、我は聲を擧げて、哭して以てこの悲哀を遣ることも出來たであらう。わが悲哀の琴線は無限の秋風に觸れて、この國家の爲めに個人の滿足を捨てゝ顧みなかつた勇ましい武士の墳の上に微かなる響を傳ふることを得たであらう。けれど……

自分は美しい日の影の下に涙を揮つて、一人荷馬車の上に搖られつゝ行つたのである。敵が機關砲を据ゑた小丘、わが六師團の兵の進めなかつた村落、見よ、敵の鐵條網、狙撃の棄てられたのと相對して、わが勇敢なる武士の墳墓は、幾箇となく、其處に土饅頭の列をつくつて、其上には小

さな低き墓標の影、前なる牛罐の空さたる花立には、野の薄の穗、いと殊勝にも手向けられつゝあるではないか。ことに、其附近の丘地の上の彼方此方、二三の兵士が彷徨せるは、もしやその親しき友の戰死の跡、慈愛深き兄弟の墓を訪へるのではあるまいか。

涙はしど〳〵に征衣を濕した。

此時、背後の車上から

『橘さんの戰死した山はその山！』

と豆君は敎へて呉れた。

其山！　と見ると、高さ大凡四十五六米ばかり、赤色に灰色を加へたる斜阪の長く延れる間には敵の掩濠、鉢卷のごとく二重三重に取卷きて、折から砲烟の颯れるごとき白き雲は、幾簇となく其平扁なる丘陵の上の空に漂ひ渡つた。少佐が身に五箇所の創を負ひて、勇猛猶其占領せし陣地を棄つるのを肯んじなかつた時の光景は如何であつたらうか。砲彈蜂の巣のごとく爆發せる掩濠の中に勇ましき穩かなる最期を取りし時の心は如何であつたらうか。自分は殆ど想像するに堪へずして、眼を塞いだ。

其時の悲哀——砲煙の野に、血に染みて横りつゝ、猶ほ國家の爲めに、個人の滿足を捨てゝ顧み

ざる非時の悲哀、これ、猶、人生であるか、これ猶、人の世の悲哀なるか。

自分は今これを記するに力がない。

路は其の悲慘なる丘陵の麓を横ぎり、敵が施した十重二十重の鐵條網、狐狸の傍を過ぎて、漸くマエトウレの村へと下つて行く。高粱の縱横に踏み躪られたる、楊柳の大樹の幹より二つに折られたる、銃眼を穿ちて敵が頑強に防ぎたる農家の壁、わが砲彈の微塵に小屋の壁を破壞せる光景など、其日の激戰を想像せしむるには充分である。村の左方に添ひて猶下ると、避難者の牛車馬車陸續として歸來し、主婦の小兒を負へるもの、小娘の猶ほ恐ろしげに四邊を見るもの等、また一場の活畫圖である。

マエトウレから頭臺子に至る、約一里半。其間只高粱畑はかり、路には馬糞、糧食を滿載した荷馬車の列が泥濘の波を畚けて頻りに鞭を振つて居る。

頭臺子は大なる村落で、農家またすぐれたるものが多い。村の盡頭には砲兵部隊戰死者の新墳があつて、兵士が二三これに詣ても居た。これから、沙河鎭までは、里程一里餘、同じく高粱畑の間はかりであるが、只、驟車の一轉進毎に、顧ると、首山の翠微漸く遠く、それに連れる紀念ある丘陵も、次第に樹にかくれ、村にかくれて、遂に見えず見えずなるので。

沙河鎭の中央を流るゝ沙河。河南は自分が來る時にこれに一夜を過しが、河北を過るのは今か始めてである。遼陽街道中（遼陽海城間）鞍山站と共に二大驛の稱がある程あつて、家並もすぐれて美に、商賈らしき家も頗る多い。ことに、川に添つたあたりには、麵包賣る肆、菓物賣る店など相並んで、清苦力の車をとゞめ、馬車をとゞめてこれを買ふもの夥しく、喧爭の聲この河畔一帶の地に充ち渡つた。

河を渡ると、日影涼しき楊樹の陰。

自分等一行は、此處に馬車をとゞめて、おくれた午餐を喫した。

炊事場の飯とて、半熟の舌觸り惡しきに、菜は福神漬の罐、牛罐、雞罐、何れを見ても食ひ厭きしものばかり。此處等に酒保の肆はないかと、彼方此方探したけれども、無い。詮方なく、有合せの菜で、通らぬ飯を辛じて咽喉に通し、水筒の水を仰ぎ飲みながら、見るともなく見ると、此方の岸には、

避難者の群

幾簇となく集つて、婦を負ひつゝ川を渡る夫の姿のいかにも可笑しいので、いづれも皆な興を催してそれに見入つた。

『何うだ、そら亦背負つた！』

今しも群の中の一人の男は、二十前後の新婦らしい妻をひよいと背負ひて、小さい脚を兩腕の間にかひ込みつゝ、さながら子供でもあるかのやうに、平氣で川を越して行く。

『習慣と言ひながら、實に滑稽だね、日本で、あれを遣つたら、何うだ』

かう言つたのは、某新聞記者。

『君等は其の手合ぢやないか』

『馬鹿を言へ』

『緣日に、目白の押合のやうに、くつ附いて歩いてるのも、あの手合と幾らも違はんぜ』

『何時くつ附いて歩いた』

『君の緣日は有名な者ぢやないか』

『馬鹿言へ』

かう言つた某氏は、言葉をとめた儘、猶他かずその徒渉せる夫妻に見入るのであつた。

『あゝしていつ迄も見てる處を見ると、先生、思出したナ』と傍から冷評を加へた者がある。

『澤山言へ、澤山言へ……』と某氏は猶見入つた。

先に渉つたもの、溯く川の中央に及んだと思つた頃、跡から、一組、二組、三組、四組まで續々と繰出し、その形、其の姿の可笑しさ、さながら棒に縋れる彈猿のやうに。

『何うだ、あのざまは！』

『實に滑稽だ！』

『愉快々々、一枚撮らう。』と、某君は傍離さぬコダックを引出して、頻りに光線の度合をはかり始めた。この面白き光景を點綴した沙河の溯つた流には、此時秋の烈しい日の影閃々と煌めきて、われ等の頭上なる楊樹の葉に美しくかゞやき渡つた。對岸には、露肆の喧爭のさま明かな空氣を透して、丸で畫のやうに見える。

あれが卅日、卅一日の司令部の觀戰山だといふ小丘陵を右に見つゝ、河南の村に入ると、わが來れる時、一夜を劒鞘雜遝の中に過した家屋には聞として一兵の影だになく、砲車、彈藥車の縱横に馳せちがつた街路にも、今はをり〳〵糧秣を載せたる馬車牛車のいと徐かに過ぎ行くばかりである。只、この間の家屋、野戰病院患者收容所に充てられたので、ゆく〳〵赤十字の徽號服を着けたる負傷兵多く、或は扉に倚りて野を眺め、或は垣の外に出でゝわれ等の過ぎ行くを目送するなど、そゞろに心を惹いたのである。

ことに、わが詩思を誘つたのは、沙河鎮河南屯を少し行つたところに、柳の多い一つの村があつて、其村の端頭に、一軒の家屋。其家屋に收容された負傷兵のさまは、何故かしらぬがいたく自分の思を誘つた。こは、何故であらう、あたりの光景の悲慘なりし爲めか。否。重傷患者の傷はしきもののあつた爲めか。否。思ふに自分の心は、其の野外の離れ家なることと、屋後の秋の日影を美しかつたことと、其家屋の開放されて明に其中に集れる負傷兵を見得たるとに由るのであらう。

その野外の家、後景には秋の日の影、前には楊の樹の影疎らに、やゝ薄暗い家屋の中に、負傷兵の或は臥し、或は凭り、或は語れるさま、いかに趣に富んで居たらうか。渠等は家郷を距ること千里、萬里、其思ひは常に東に馳たる身、われ等歸國の車を見て、いかに心を動かしたであらうか。

アルフオンス、ドオテエが集中、普佛戰爭の役、負傷して、近隣の村舍に傷痍を養へる一人の軍曹が、其家の若い美しい少女に戀するといふ短篇のあつたことを、此時、ゆくりなく思ひ出した。けれどこの野外の家には、さるやさしみの相應しきものあるべき謂れがないのである。否、滿州のごとき塞外に戰へる將校兵士は、さる美しきもの、やさしきものゝ髣髴をだに得ること能はぬのである。

で、自分は久しく負傷兵のことを思つた。

少時行つてから、せめてはかの野外の家、野菊山菊の花だにあつたなら……と思つた。けれど花のないのは、滿州の野、廣くは唯漠ばかり。鄉國にあるものよ、願はくは、この負傷者に、其節毎に咲き匂へる花を寄せよ。

八卦溝を過ぎて、其の西方に蜿蜒せる小丘陵を斜に越えると、今しも滿面に秋の日影を帶びた鞍山站一帶の平野には、駱駝の脊のごとき鳳龍山、深紫の色を粧ひて、その展望の美、實に狀すべからざるものがある。けれど、到る處は皆同じ村、皆同じ楊柳、皆同じ牛車馬車の連續、詩興を促す程のものも無いので。

日暮風寒く、漸く鞍山站の停車場に着いた。鞍山站停車場は、鞍山站驛を北に距ること一里半餘、蒋堡の北十四五町にあるのである。皆な露國の經營せるところで、一箇の大停車場の他、事務局、官舍、兵舍等、其家屋の數大凡五六十、兵站司令部は停車場の中にあつて、司令官は杉江大尉。先づ、馬車を停車場前の廣場に留め、其儘兵站司令部へ音信ふと、線路を傳つた坪谷君既にありて、食事宿營等の雜務を辨じ呉れられたのは此上なく嬉しかつた。

鞍山站停車場に近いた時、自分等は既に其附近の何となく賑はしく、騎兵歩兵の往來など常に似ず頻繁なのを認めたが、司令官に問いて、初めて閑院宮殿下の今宵この地に宿舍を取り給ふこと

を知つた。で司令官及び以下の部員は一方ならぬ繁忙を極めて居るが、しかも猶よくわれ等一行の爲めに、注意周到なる世話を取つて呉れたのは、われ等の特に感謝するところである。ことに、自分は病後の身、今宵は貨車の中に寒き一夜を過さなければならぬかと憂ひたのは、自分等十二名の爲めに、特に其の事務員室を御愛し呉れたのは尤も嬉しい限りですつた。まして夜更けて後大尉自から酒を携へ來つて、われ等をして一杯の日本酒を傾けしめたるをや。

自分は昨夜から病後の身に風邪を惹いて、多少の惡寒惡熱を總身に感じ、氣分又甚だ勝れないので、再び海城・兵站・病院に暇去りにせらるゝやうなことがあつてはと、注意の上にも注意を加へ、其夜は軍醫部から貰つたヘプリンを服し、毛布を頭から被つて寢た。

九月十日（土曜日）晴

氣分稍々輕快。

此處からは貨車に便乘する筈であつたが、貨車出發時間が遲いから、海城までは昨日と同じき馬車旅行を續くることに決し、朝七時、停車場を發して、鞍山站へと向つた。

鞍山は眞に是れ天然の關門、駱駝のやうな鳳龍山は直ちに七百餘米の高地を起して、其山の鞍部、

一道の溪流南から北に流れ、水に添つて辛うじて一路の彎曲たるのを見るのである。であるから敵がもし、これに據つて拒がうなら、我が軍は少くとも二三日の激戰を爲さなければならなかつたであらうものを。軍略上餘義なしとは言へ、むざ〳〵この天險を人に委し去つた露兵の怯も亦惻むべしである。

馬車はよくもあの險しい處をと思ふやうな路を右に曲り、左に曲りつゝ、一度は山腹を蛇行し、一度は溪畔を迂回し、遂に下りて、清淺掬ぶに堪へたる溪流を涉り、次第に鞍山站の村落へと近づいて行つた。自分の來る時には、便を貨車に借りて、一直線に鐵道線路をたどるので、山の聳立、溪の屈曲、風情あるところとは思ひながらも、しかも其勝のしかく詩趣に富んで居やうとは夢にも想像しなかつた。想像して御覽なさい、柳多き村、其の村を越えて、とある阪を登ると、鳳龍山の岩石は壓するがごとく、溪流の屈曲は銀蛇の走るがごとく、四近の風景はさながら尺幅の中に無限の烟波を籠めた名手の畫圖にそのまゝである。自分は久しく山水に渴した身、この扇頭の小景にも少なからぬ興を催して、胸臆に上り來る吟詠の二三を手帖に書き留めながら、次第に前へと進んで行つたが、鞍山站の荒驛に至るに及んで、わが興は愈々加はつた。

柴田君が語つて言はるゝには、「實に、この鞍山站は十年の中にすつかり衰微して了つたといふこ

とです。管理部のある將校の話ですが、日清戰役に來た時には、それは中々盛んな驛で、城廓など も今日のやうに崩れて居ることはなく、商家櫛比といふ光景であつた相です。ところが、今度來た ら、丸で變つて居て別な處か知らんと思はれる位でしたといふ事です。何が原因でかうすつかり衰 微して了つたか知れんけれど、實際、それは酷くなつて居ます。大家の潰れたやうな跡もまた殘つ て居りますし、其家の周圍の石垣などもまだ形を崩さずにちやんとして居る。何でもそんなに古い 事は無い、四五年この方でせうといふ事です。』

この山水にこの荒廢せる古驛！　何たる風情ある反映であらうと思ひながら、自分は次第にわが 前に近づき來る光景を見た。阪路昇降し盡して、先づ眼に入つたのは、林叢の中に埋れた壞殘せる 城壁の形、其城壁には草が離々として生じて、楊柳の影はその昔を偲へよとばかり低く其の四近に 靡き波つて居る。壞殘した城壁のところ〳〵、微かなる秋の日影が、斜にさし透つて、中に無名鳥 の聲低く囀れる、誰か自然人事の變遷の急なるに轉た腸を斷せざるものがあらうぞ。愈々進むと、 城壁は愈々近く、果てはわれ等の過ぎ行く道路の恰も其中に通じたのを認めるので。

城門題して曰く、『鞍山驛站』と。

其古びた筆の句、壁に這ひまつはつた深い苦には、いかに深き意味といかに永き歲月の轉移とを刻

んで居ることか。この古にし城門の題額、此處にも猶過ぎし榮華の痕を留めたのであると思ふとす る間に、わが乘れる荷馬車はがた〳〵と阪を下りて、其の

彎形爲せる古關門

を過ぎ行くのである。

一歩々々、見ゆるもの皆わが興を惹き、わが情を傷ましめぬはない。崩れた石垣の中には葱、菜 などの畑があつて、昔住んだ人の摘み取つたと思はる林檎梨の果樹多く叢生し、其傍には庭の跡ら しい、池水の濁り果てゝ日影もうつさずなつたのがある。路の兩側には、僅かに踏留つて殘つたと 覺しき商賈の家屋疎らに點綴せられて、赤き商標のぴら〳〵と風になびくのも淋しい。言葉完全に 通じたならば——詳しく此古驛のことを聞き得たらば、詩に歌ふべき材料も多からうなど思ひな がら、自分は低回俯仰久しく去るに忍びなかつた。

劉家店、楊家屯を過ぐると、溫泉のある湯崗子、それから一里ばかりて新臺子に行くのてある が、此間には別に記すべきことも無かつた。

甘泉堡を經て、日の暮れんとする頃、漸く海城の北門を前面に認むるあたりまて來た。海城停車

場は彼處、自分が半月を過した兵站病院はかの家などと語合ひて進んで行つたが、をりから路は泥濘深さところに嵌つて、馬は御者の鞭に喘ぎ、車輪また左右に深く陷りて、幾度か顚覆せんとしたのを、車の柱に支へながら辛うじて過ぎ行く時、再び陷れる泥濘の凹地に車は半ば傾きたりと思ふ間もなく、自分は中心を失つて毬のごとく地に墜ちた。否、車はわが足を引いたのである。

『引かれた！　引かれた！　足を引かれた！』自分はかく叫んで立上つた。

其瞬間はさして苦痛を覺えなかつたが、二三時間經つと、非常に痛み出して、海城兵站病院で、石炭酸の濕布繃帶を爲て貰つて、宿舍に着いて、身を横へたが最期、もう再び立上ることが出來なかつた。何たる危禍！

九月十二日（月曜日）晴

殆ど一行諸君の肩に負はれるやうにして、漸くに旅行を續けたが、此日、日の暮れ〳〵に金州に着いて、曾て砲烟彈雨の中に馳驅した山川を少なからざる興味を以て眺めたのである。

昨日の朝、海城を發つて、十一時に他山浦に着いたが、自分等の乘つた貨車の前に、英國のニコルソン中將が行つたので、其の貨車の大石橋に着くまでは出發せぬとかで、夏の暑い日盛を、樹蔭

もなく、じり〳〵と上から照り付けられながら、午後四時過ぎまで待つた。大石橋に着いたのは、もう暗くなつてから、直ちに兵站司令部に行つて、營口行を談判すると、丁度昨日からその方面に貨車が行かぬやうになつたとのこと。これは汽關車が大石橋まで通じたからで、今朝始めて開通したとの話である。自分等は營口で一休憩したいと思つた身の、これを非常に殘念に感じたが、その方面に行くには、一日アタ〳〵車で搖られて、さて行着いてから、丁度好い鹽梅に船にあるか何うだか解らぬので、餘義なく方針を變へてダルニーに向ふことに爲た。汽車の發車は其夜の十時。宿營を取るほどの暇はなく、干鰈を嚙みながら、夕飯を終り、時刻を待つてそれに乘つた。それにしても愉快なのは、此の汽車。昨日までは、今日までは、蟻の跂うやうな貨車の綱曳に、轉た道のはかどらぬのを佗たのであるが、これからは唯一飛び、來る時は二月、三月も懸つて辛苦してたどつた道を、一日二日の中に行きつくのであると思ふと、無蓋車であらうが、夜露に濡れやうが、そんなことは眼中に無いので、自分等は唯々限りなきの愉快を覺えた。で、汽車は大風の吹き渡るやうな響を四面に振はせつゝ、闇中を全速力で走つたが、熊岳城の停車場あたりから、いつとなく華胥の境に遊んで、北死房店の停車場に久しく留つたのも知らなかつた。ふと眼が覺めると、四面は黑い山の影、其の東の山際が少しく黎明の光を帶びて、やがて夜の明離れるのも程が無い樣子。傍な

る人に訊くと、得利寺はもう直ぐだ！と教へて呉れた。

明け離れ行く曉の光、自分は得利寺の新戰場をいかに深き趣味を抱きつゝ過きだであらうか。第十九旅團の突擊を試みた夾河心、柯家屯の諸村落、敵の敗走した崔家屯、初家屯の道路、をりからの朝霧は復州河の本流支流を蔽のやうに蔽つて、其の底には楊樹の綠がぼんやりと薄く見える具合、實に何とも言はれぬ。得利寺の停車場、此處に着いた頃にはもうすつかり夜が明け離れて居つたが、其附近からそろ〳〵龍潭山やら、龍王廟高地やら、龍家屯北方高地やらが見え出して、復州河の紆餘屈曲して流れて行くさまも手に取るやうに眼に入る。あれか敵の砲兵陣地、彼處の山の陰が第三師團の苦戰したところ、などと得意になつて自分は一行諸君にこの戰跡を指點して居たが、堀君が不意に、

『彼處ですねえ、ずぶ濡れになつて立つて居た岩は！』

と指さした。

成程、其岩、其川、其楊柳――と見る中に、汽車は龍家屯北方高地の麓を掠めて、溫家屯、王家店、遂に、その一帶の隘路を出でゝ、南瓦房店の平野へと走つた。

南瓦房店に着いたのは、午前七時、この汽車は此處までゝ留るので、自分等は餘義なく車を下り

て、其の廣い停車場に、午后二時に來るべき汽車を待つた。

脚は相變らず痛いが、濕布繃帶を倦まずに施した爲め、出るべき筈の熱は出ず、三間位は杖をたよりに歩くことが出來るやうになつた。

二時の汽車が後れて五時。それには負傷兵が滿載されてあるので、あぶなく置いて行かれる處であつたが、北川司令官の好意に因つて、辛うじてそれに便乘することを得た。拉子山、丑家山咀、これ皆第二軍の經過し去つた地、何を見ても追懷の情に堪へぬのであつたが、普闌店、三十里堡と段々通過して、やがてなつかしいのは老虎山の夕陽に聳ゆる麥。十三里營子の凹地を拔けると、金州の盆地は左右に大連、金州の兩灣をひらきながら、薄暗い暮色の中に遠く廣く横つて居るのである。

金州の停車場で日は全く暮れたが、大房身の停車場に行くと、丁度青泥窪行が今汽笛を鳴して出發しやうとしつゝある處で、自分等一行は慌てゝそれに乘移つた。

難關嶺を過ぎて、三十里堡に近く、汽車は其儘闇の夜を縫つて、直ちに青泥窪にと向つたが、ふと見ると、旅順方面に當つて、縱横に闇を斫る

敵の探照燈の光

それを見ると其方面の戰がそれとなく想像せられて、何となく胸の躍るのを覺ゆるのであつた。

ことに、山を離れて、海岸近く進むと、曾つて荒涼寂寞たりしダルニーの市街は、電燈燦として海波に映し、其壯觀！

青泥堡に着いたのは、午后十一時、汽車から下されて、荷物やら、夕餐やらに手間を取つて、宿舍に就いたのは、彼是一時過でもあつたらうか。ことに、其宿舍は停車場から遠いので、自分は脚を痛めた身の、何んなに苦んだか知れぬ。歩く、負はれる――否、終には地上を這つて、辛うして其宿舍に行つたのてある。

けれどもう此處まて來ば大丈夫、車から船舶、汽車、もう歸國したのも同樣と、心を安んじて、ぐつすり眠つた。

九月十三日（火曜日）晴

青泥窪は三月前に來た時とは大違ひ、昨夜既に電燈のきらめきと車馬の陸續たるとに驚いたが、今朝眼覺めて見ると、四近は皆店を開いて、其繁華なること、丸で横濱か神戸にでも行つたやう。

先、第一に、坪谷君が碇泊司令部に船の出帆の模樣を聞きに行つたが、一時間して歸つて來て、さア、諸君、大急ぎに準備し給へ、正午に出帆する備後丸に、九時まて來れば便乘させて遣る相だ！と丸で後から火でも附けられたやうな性急、青泥窪てゆつくり一日位遊び度いとは誰しも思つて居るのではあつたが、さりとて一刻も早く歸り度いのはまた山々であるので、不平を言ひながらも、皆忙しく出發の準備にと取懸つた。

自分も脚が達者で、市中を歩き廻ることが出來るなら、無理にも留つて、少しは異つた觀察も爲たいのであるけれど、それも自由の利かぬ身の、一刻も早く故郷へとのみ急かれて、坪谷君の倩つて來て呉れた俥（支那人の曳く）に乘つて、其儘碇泊司令部へと赴いた。

碇泊司令部は埠頭の東の盡頭にあるので、途中、自分等は詳しく支那市街の繁華と雜踏とを見ることを得た。露肆は數限りもなく路傍に開かれ、菓物、生肉、魚肉、麵麭を賣る支那商賈の聲は實に到る處に滿ち渡つて聞えた。此地は立派な日本の青泥窪となつて了つた。

碇泊司令部に行つて、旅行券を示し、十時過ぎに備後丸の甲板に上つた。

午後一時出帆。

あゝ靜かなる日、穩かなる波、青泥窪の粉壁は舵器の一轉進毎に次第に遠く微かになつて　一時間後には、自分等が辛苦して上陸した鹽大澳の尾角を髣髴の間に認め、長山列島の南を掠めて、漸く遼東半島を烟波の中に失つて了ふのであつた。

來る時とは違つて、中等室の軟かなる白い寢臺、三度の食も食堂に就いて、旨い肴の一皿二皿。心地好い風呂をさへ沸して貰つて、丸で極樂にでも來たやうな心地。臥しながら、空氣窓から見ると、碧い海、白い波、美しい日の閃耀。

自分等は終日本國の事を語り合ひつゝ、絶えず美しき島山へと憧るゝので。

かくて一日。二日目の午後三時、萬歳の聲は甲板の上に起つた。見よ、なつかしき肥前、壹岐の山影は蒼く、蒼く……

翌十六日は、門司、宇品。

第二軍從征日記終

明治三十八年一月二十日印刷
明治三十八年一月二十三日發行

（第二軍從征日記）
定價金六拾錢

不許複製

編者　田山錄彌

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　飯田三千太郎

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

2-248
エト3767

文學士 漢學専攻科文 久保天隨君編述

東洋

大判和裝並綴總紙數約三千六百頁
全十二册
正價金五圓
小包送料五拾錢

第一卷目次

▲上古期 漢族生育時代▼ ◎三皇五帝の世 ◎東亞と漢族の移動◎漢族の神話◎漢族文化の最大原因と三皇◎堯舜の世 ◎三代の興亡 ◎夏◎殷◎周初の治平◎周代國家組織の一班◎周室初期の衰運◎宣王の中興◎幽王の弑と周室東遷 ◎春秋の世 ◎十二諸侯の起原位置及び當時の趨勢◎春秋初期諸侯の紛擾◎鄭者の起原と齊の桓公◎宋の襄公◎晉の內亂◎晉の文公◎秦の穆公◎楚の莊王◎晉國鄭衆の餘威◎吳楚の消長◎吳越の興廢◎晉の三桓◎齊の田氏◎三晉の分裂◎小國の衰亡 ●戰國の世 ◎七國の分立◎三晉の隆興◎秦の孝公と衞鞅の學法◎魏の惠王の挫敗◎蘇秦と六國の合從◎張儀と六國の連衡◎楚の懷王の囚死◎燕齊の報復◎趙の衰敗◎六國の覆滅◎漢族勢力の被及區域と四夷 ◎先秦漢族の人文 ◎學術◎宗教◎技藝◎社會事態の一班

第二卷目次

▲中古期 漢族繁榮時代▼ ◎秦の帝業◎始皇の施政◎二世の即位◎秦民の離畔◎劉邦の入關と秦の滅亡●楚漢の角逐◎項羽四楚の覇王◎劉邦關中の平定◎楚漢の分爭(上)◎楚漢の分爭(下)◎項羽の敗死 ●前漢の世 ◎高祖の諸政◎匈奴と南越◎高祖の晚年◎諸呂の變◎文帝仁儉の政◎吳楚七國の亂◎儒學の興隆◎武帝の外國經略(其一—匈奴、其二—四域、其三—閩越、其四—朝鮮、其五—終局)◎武帝の內治及び晚年◎霍光の輔政と霍氏の敗◎宣帝の中興◎四漢對外策の成功◎元帝宣帝の禍◎外戚の專橫◎王莽の篡奪 ●兩漢の過度◎新朝の施政◎外寇の離畔◎王莽の敗亡◎更始と光武の即位◎群雄の剿平

第三卷目次

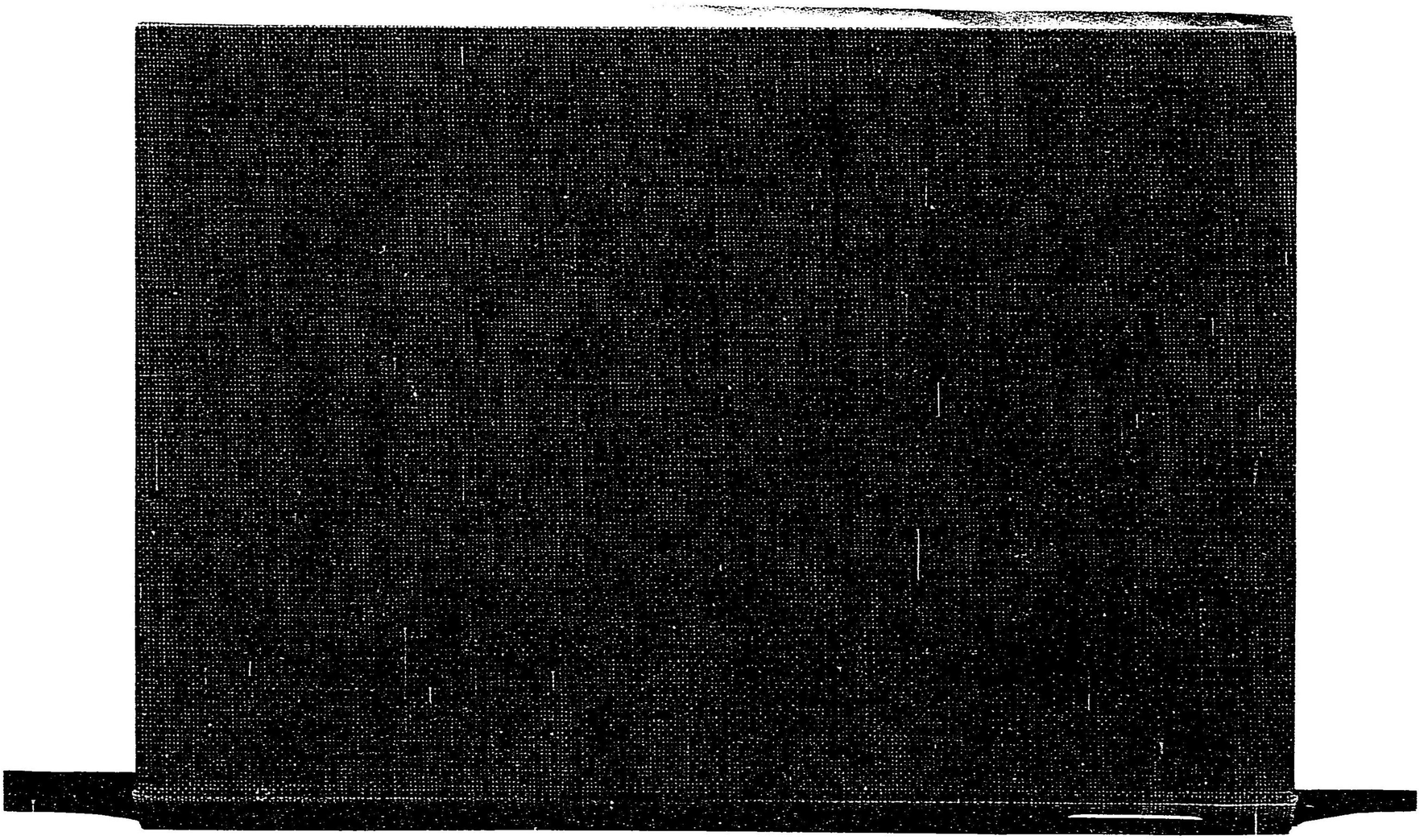
●唐の末世◎懿宗の失政◎二王の變◎黃巢の治◎宦官の禍◎牛李の朋黨◎宣宗の治と回鶻吐蕃の經滅◎唐室の滅亡 ◎五代十國の世 ◎梁唐の交爭◎後唐莊宗の末運◎契丹の勃興◎唐晉の交聲◎遼の南侵◎劉郭二氏の興亡◎周の世宗 ●漢唐間の人文 ◎學術◎宗教◎技藝◎社會事態の一班

第七卷目次

▲近古期 蒙古の優勢時代 ◎北宋の盛衰◎太祖の基業◎太祖の勝政◎太宗の經略と疆外の形勢◎澶淵の盟◎天書◎遼の極盛◎仁宗の即位◎四夏の建國◎仁宗の守文◎王安石の新法(上)◎王安石の新法(下)◎神宗四境の交涉◎元豐元祐の政◎洛蜀兩黨及び調停◎正邪の分爭◎徽宗の昏德◎遼宋の勝帝◎金の興起◎遼の滅亡 ●宋金の對立◎汴京金兵の寇◎徽欽二帝の北狩◎高宗の南渡(上)◎高宗の南渡(下)◎宋金の媾和◎海陵王の暴虐◎孝宗世宗の治◎韓侂胄の專橫

第九卷

●蒙古の勃興◎蒙古の起原◎蒙古の四隣經略◎成吉思汗の即位と征金の師◎四遼の滅亡と中央亞細亞の形勢◎成吉思汗の四征◎宋金夏三國の均衡◎夏の滅亡 ●蒙古の隆昌◎金の滅亡◎宋元の爭端◎高麗の形勢◎拔都の歐州經略◎太宗崩後汗位の繼承◎忽必烈の南侵◎旭烈兀の四征◎憲宗の出師と世祖の即位◎宋の滅亡◎崖山の戰と宋の遺臣◎元兵日本の敗◎東南亞細亞の征伐 ●元室の治世◎蒙古の極盛と東西の交通◎海都の離叛と諸汗國の背◎世祖の內治及財政◎元室の衰微 ●宋元間の人文 ◎學術◎宗教◎技藝◎社會事態の一班



84
218
Ⓜ

002777−000−7

84−218

第二軍従征日記

田山　花袋（録弥）／著

M38

ACB−6243